

昭和十一年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)  
昭和十一年八月廿日印刷納本 昭和十一年九月一日發行

第二卷 第九號

# 淨土



號 月 九

# 講話

浄土信仰の眞髓は實にこの一文に盡く！

日本信仰史上に燦然と輝く法然上人の『一枚起請文』。この一文の中に籠る信仰の精神を知らずして、信仰の何々たるかを語るは潜越である。この簡潔流麗なる語句の中に脈うつ深く豊かな宗教の眞理が當代隨一の名講義によつて、解り易く讀者の心に滲込んで行く！

新刊  
出 來 !!

布教用書の  
最高峰

## 枚

## 起

## 請

## 文

宗教講話に新生面を開いた名講義！

定價 拾二錢  
送料 共

發行所

法然上人鑽仰會

振替……東京八二一八七

本會は特に浄土信仰普及のため左の如き犠牲的奉仕をなす

一度に十部以上  
購入されれば

一部當り 九錢 (送料不要)

寺院の布教用、工場會社等の修養讀物として、最適！

# 金屬原色肖像

皆の肖像を永久に傳へませう!!

寫眞よりも畫よりも永久的で而も藝術的です

## 特

## 長

- (一) 金屬性なること。故に火災水災等に消失せず
- (二) 寫眞をそのまゝ獨特の腐蝕法によつて現はす
- (三) 畫よりもつと鮮かな色が出て褪色變色落剝しない様に獨特なる焼付彩色をしてゐる。而も藝術的
- (四) 保存中の手入が簡單で誰にも出来る
- (五) 價低廉なこと

## 説明書贈呈

記念品等には最もよいものだと思ひます。尙像ばかりでなく畫・書等も現はすことが出来ます。

説明書を必ずごらん下さい。



東京市小石川區新諏訪町二番地

大日本金屬美術工藝社

工場

第一製作工場

東京市本所區厩橋三丁目一番地

(電話) 墨田(74) 四二四五番

## 肖像入金屬永代位牌

金屬原色肖像を巧に位牌に應用し更に御法名を彫刻し、

「肖像入金屬永代位牌」

を創案致しました。皆様直ちに御採用下さい。そして祖先尊崇の誠をお盡し下さい。

專賣特許實用新案  
登録出願壹七〇〇九號

説明書贈呈

直にお申込下さい



◇ 浄土 第九卷 九月號 目次 ◇

・表紙……………井上正春

・扉……………赤尾光雄撮影

・目次カット……………鈴木金平

想 舒 懷 二 章……………琴曲家 宮城道雄(二)

名僧に聴く

跡を遺さぬ世界……………管洞宗長 鈴木天山(八)

極樂ちがい……………浄土宗 野上運外(二〇)

平家物語 燈籠大臣……………畠四郎(二四)

隨筆 松 蟲 鈴 蟲……………松岡讓(二八)

傘(かさ)……………佐々三々雄(三〇)

信 仰 相 談……………(三三)

鳴 立 庵 の 記……………赤尾光雄(三六)



小説 赤

蛙

(あかがへる)……………一瀬直行 (三)  
青柳喜兵衛畫

コードモのさいしよ 最初の酒造りの話 (はなし) (鈴木金平畫)……………奥 榮 一 (四)

家庭欄 赤ちやんの扱ひ方……………田中豊善 (五)

芝居の話 宗教因芝居色彩……………狸亭庵主人 (六)

天台山聖蹟參拜の記……………野口周善 (八)

一讀 實話 馬になる氣……………大木三太郎 (三)

談話 本多の釜碎き……………小池專之介 (四)

★頁物 落語 親ごころ……………上原六朗 (九)

小説 一夜の悟から (中二畫)……………國枝史郎 (六)

歌 壇……………與謝野晶子選 (五) 鐵仰運動ニユース……………(七)

法語 講義 絶望ののちに來るもの (あふ)……………中村辨康 (三)

編輯後記……………(七)

# 法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 三十四錢

これぞ光明！ 時代の悩みを一身に背負ひ、精  
魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生  
活の跡！

現代日本人が擧つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齎らした巨大無双なる聖、我々が祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求めてやまぬ信仰と最も良く合致するものである。

この書には、上人が萬人と共に悩み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう新切丁寧に説かれてある。

讀んで得られよ！ 正しい信仰を！

## 目次

第一 求道生活——第一期求道生活——求道の動機、恩讐の彼方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。三第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡空上人との接觸。四第四期の求道生活——願學歴訪の旅。五第五期の求道生活——再び讀書生活へ。

第二 信仰生活——入信時代の新生活——強い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活——山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて来るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆縁を順縁と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

◇ 發行所 法然上人鑽仰會 ◇

淨

土

九月號

おほかたは世間も出世も、  
道理はたがはぬ事にて候也。  
心ある人は父母あはれみ、主  
君もはごむにしたがひて、悪  
事をばしりぞき善事をばこの  
まんとおもへり。悪人をもす  
て給はぬ本願ときかんにもま  
して善人をばいかばかりか、  
よろこび給はんと思ふべき也

法然上人法語抄二二七



鎌倉長谷の大佛

# 舒懷二章

宮城道雄

## 一、兄弟の蓄音機

私の友人に、彫刻家で永くフランスに行つてゐて、ハープ（西洋の豎琴）を研究して歸つた人がある。その人は元來、京極流の箏に堪能であつた。

その友人が、一晚演奏會をやることになつたのであるが、プログラムの中に、私の作曲した「湖邊の夕」といふのを、ハープと私の箏で合奏しようといふことになつた。ハープといふ楽器は大きくて練習するのに持ち運びに困難であるから、不自由なからだで氣の毒だが、私に來て呉れといったので、私は或る時友人の家に練習に行つた。練習が終つてから、友人が、自分がフランスから持つて歸つた、日本にない面白いレコードを聞かせてやらうといつたので、私はレコードを聞かせて貰ふことになつた。丁度そこへ、友人の弟さんも來てゐた。その人は文部省に勤めてゐる人であつた。二人で蓄音機を運び出して來て、私に聞かせるために、色々レコードをかけ始めたところ、その蓄音機は大分古びた機械らしく、段々螺旋がゆるんでやゝもすると、止まり勝ちになるので、兄が困つてゐた。すると、弟さんが傍から手傳つて、「兄さん私が手で廻して手傳つてあげる」といつて、廻してゐたが、手をゆるめると、また音が下つてしまふ。兄の方が私に、「新しい蓄音機を買はうと思つてゐるがまだそれも買はず

にゐる」と、云ひわけらしくいつてゐた。さうして、さういふうちにも又、螺旋がゆるむので、弟さんが一生懸命に私のために、廻して呉れた。

その時、私は心の中で考へたのであるが、何千圓もする立派な蓄音機を聞かせて貰ふよりも、どれだけ嬉しいかわからなかつた。そして、金には代へられない事だと思つた。而も、兄弟といつても、二人とも既に四十を越してゐるのであるが、古びた蓄音機を圍んで、二人が子供に還つたやうな氣持で、私をもてなして呉れたのであつた。兄弟といふものはずっと小さい時は、よく喧嘩をするものである。そして、今喧嘩をやつてゐたかと思ふと、もう一緒になつて遊ぶものである。所が年をとつて、兄弟仲違ひをして、お互に往き來もしないのを、いくらかも世間に見受ける。さういふ事を考へると、この兄弟は何といふ幸福な兄弟仲なんだらうと思つた。年をとつても、兄弟同志がお互に會つた時には、子供の時の氣分に還つて仲睦じくやりたいものだ、私は思つた。

## 二、父の死

今年の春、私は父と死に別れたのである。父は始終田舎に別居してゐた。私は父が前から病氣だといふことは知つてゐたのであるが、それ程ひどく悪いとは思つてゐなかつたのに、急に悪くなつて、危篤の電報を受取つた時に、その三日後に演奏を引受けてゐたし、その會には私は大勢の人を相手に、私が主となつて出ることになつてゐたのである。

ふだん私は父と別れてゐても、いつでも會へると思つてゐたので、左程に思つてゐなかつたが、危篤の報に接した時には、私はもうこれで一生會へないと思つたので、是非、今日行かうと思つた。併し、今自分が演奏會を捨て行つたら、折角大勢の人が練習をしてゐるのが、目茶々々になり、演奏會が凄狂はせになつてしまふ。而も、その曲は、その會のために私が作曲したもので、初めて發表するものであつた。演奏を控へての準備の練習最中に、かうした報せを受取つて、私は如何ともすることが出来なかつた。

それで、私は自分が行くことを止めて、家の者を私の代りに行かせた。そして、その翌日、私が發表する曲を

練習してゐる最中に、死去した、といつて電報が来た。今その事を皆に發表すれば、皆の手が中途でゆるむのはきまつてゐると、私は思った。それと同時に、私は心の中で、もう父には會へないと思つたら、何だか辛い思ひがしたけれども、皆と一緒に練習を續けてゐた。私は世の中のまゝならぬ事はかういふ所にあるのだと思つたが、皆の者にも何も知らさずに済ませた。

それから、その後もひまがある毎に、父は死んだのかと、何遍も事新しく思ひ出すのであつた。父が生きてゐるうちに、父と死に別れることなどは想像もしてゐなかつた。

その後、父の葬式に行つて歸つた者の話を聞くと、父は非常に安らかに大往生を遂げたと聞き、又、笑ひ顔さへしてゐたと聞かされて、私の心はそれだけでも慰められたのである。私は今のところでは、何といつて信仰はなお經の一つも唱へた事はないが、お經とは別に關係がないけれど、私の氣持はどういふものか論語の本を読んで見たいといふ氣になつて、點字の論語を一生懸命に讀んだ。そして又、チャイコフスキーのバテイクシンフオニー（悲想曲）を聞きたいと思つて、レコードをかけた。私は暇さへあれば、論語を讀み、レコードをかけて聞いてゐたのである。かういふことをするのは、今更感じ易い年若い青年のやうな氣がして、何だかこの年をして氣恥かしいやうな感じもするのである。

私が論語を讀む氣になつたに就いては、別に理窟はない。「父在世時は遠くに遊ばす」といふやうな文句を思ひ出したのらしい。自分にも原因はよくわからないが、私は曾て、自分の親しい友人がなくなつた時に、葬式に列席したらそれがキリスト教であつた。その時、友人總代といふ人が聖書の或る一部を讀んだことを、私は、記憶してゐる。後から思ふと、さういふ所から論語を讀みたくなつたのだらうとも思ふし、又、論語を通じて一貫してゐる嚴肅な氣持があるのを、私は好きになつて讀むやうになつたのだらうと思つた。

それから又、私は父のこの死に對して一つ感じたことがある。それは、いつか、佐藤春夫氏とお目にかゝつた時に、しきりと宗教の話が出た。私は今日何も信じてゐないが、若い時は非常に禪が好きで、坐禪を組んだりしてゐたことがある。今から考へて見ると、それは野狐禪だつたかも知れない。その當時は他力教よりも自力本位のもの



でなければならぬと思つてゐたが、佐藤氏のお話では他力教の方が宗教としてはとるべきだ。そして自分が現世に於て知らず識らず犯した罪を、佛の前に禮拜して軽くして貰ふやうな宗教でなければならぬといはれた。

私も近頃年をとるに連れて、どうも我々素人には他力教の方がよいといふ氣がし出した。それは、世の中が非常に急がしく、自分も毎日仕事に追はれて、ゆつくりおちつく時もないので宗教の修行に致頭することは出来ない。そして、坐禪をしたりして、悟るいとまもないのである。結局、自分たちのやうな宗教に對する素人は、知らず識らず犯した罪に對して許して貰へるやうな宗教が、いゝやうな氣がするのである。

それで、今度の父の死に對しても、ふだん私は信心をしてゐないので、苦しい時の神頼みのやうではあるが、佛に對しても、父が極樂へ行けるやうに願ひするより他に仕方がないと思つてゐる。かうした氣持で、佐藤氏のお話には共鳴してゐる次第である。

話が太變陰氣になつたが、父の死に對して悲しい氣持のうちにも、をかしいことがあつた。丁度父の不幸を聞いて、私の弟子の御兩親が禮服を着けて、くやみに來られた。「一體お年はおいくつですか」と聞かれたので、私は「年に不足はない丁度七十です」と答へた。すると、家の者が私の背中をつゝくのであるが、私にはどういふ意味かわからなかつた。後で聞いたらそのお弟子のお父さんが丁度七十であつたときいて、私は太變悪いことをいつたと思つた。

それから葬式に行つた者が歸つてからの話に、又向うでも大失敗をやつたさうである。それは葬式が済んだ後で近所へお禮廻りに行くのである。その時は必ず提灯をつけて廻るのださうであるが、時間がまだ早くて、明るいので、提灯に火をつけないで行つたら、先方では變な顔をしてゐて、碌にもものもいはない。それに挨拶を済ませて歸る時も見送の人が矢張り餘りものはいはない、そして、も一度提灯に火をつけて來て呉れ、火のついてゐないのは縁起が悪いからといふので、慌てて歸つて、提灯に火をつけて、改めて出直して前と同じ口上をも一度くりかへしたさうであるが、これがその田舎の習慣になつてゐるのださうである。よく「面を洗つて出直せ」といふ言葉があるが、「提灯をつけて出直せ」といふのだなあと、私はその話を聞いて、獨りをかしくなつた。

# 名 僧 に 聴 く

極樂ちがひ……野上運外  
跡を遺さぬ世界……鈴木天山

## 跡を遺さぬ世界

曹洞宗管長

鈴木天山

現代の人々は、日々の談笑の間にも、尤もこれは冗談でありませうが、

「僕は世間が嫌になつた。」

とか、

「世の中はうるさいものです

ね。」

とかの言葉を、平気で言い交はして居ります。納は斯うした言葉を聞きたびに、世の中に對してまことに「勿體ない」といふ感じを深くさせられるものであります。

こんな言葉を、つねに用ひてゐますと、自然その心持ちまで、汚れてまゐりまして、本當に世の中といふものが、全く文字通りの濁世と見えて來るのであります。

此頃の新聞紙の社會面は毎日のやうに、この濁世の姿を、あらはに報じてゐます。多くの家庭悲劇も、この濁世觀に彩られて、初めて表面に現はれて來るのであると思ひます。濁つた心で眺めますから、大切な夫までが氣に入らなくなつたり、缺點が見えたり、また妻の振る舞ひに對しても、不服勝となつて簡單な口争ひが、忽ち刃傷沙汰にまで發展をすることになり、これがその日／＼の新聞種

●●●●  
隨筆

龍のひげと

雜草

吉水辨道

龍のひげといふ草がある、雨滴れ落へ植ゑた處、二三年にしてふさ／＼と茂つて來た、近頃よく見ると、處々色が變つてゐるので、へんに思つて、手にとつて注視すると、いつまぎれ込んで來たものか、一見全く同じ形をした草で、實は全然種類の異つた雜草が入つてゐることが分つた。イヤ其の雜草のために肝腎の龍のひげの次第に蠶食されてゐることが分つた。一寸呆れる、こんな草の社會にも贗物がはびこつて本物を壓倒してゆく有様に……。さういへば昆蟲の社會など、ことに蜂などには、幾種類贗物があるか知れない、蛇などの一種が巧に蜂の形に似せて、それを保護色としてゐる奴が幾らもある。

となつて、社會面を賑す結果になるのではないかと、心得るのであります。

そこで、衲は、お互ひに、まづ世の中は、どこまでも立派なもの、つまり極樂の世界であるといふことを、根本的に理解して頂きたいのであります。

衲は、この世の中といふものは、單なる見方の相違なく、純粹に七寶莊嚴の淨土であると確信してゐるものであります。

釋尊も、その昔に於て、

「世の中のすべてのもの

は、生あるものは勿論、人の心には、生なきものと見ゆる、山や川、乃至草木に至るまで、悉くみ佛の姿であるぞよ。」

と、その御實感を叫ばれてゐますが、まことにその通りであります。

私共に、一點心の曇りがなければ、この世

界に、見るもの、聞くものみな悉くみ佛

のお姿でないものではなく、聞くものとして、

み佛のみ聲でないものはないのであります。

して見ますと、心なく足に踏みつけて行き

ます、道の小石までが、み佛の姿を現はし、

み聲を發して、吾等に深きみ法を垂れてゐる

ことに氣付かれるのであります。

衲は日頃、幾多の

先聖の勝蹟を尋ね、

一寸でも、之等の方々に

近づかんものと。及

ばぬ努力を傾けてゐる

のであります。が、わけ

でも御宗の御開祖法然

上人様には、ひたすらに御敬服申上げ、その

御高邁にして幽遠なる御信念に對し、尊信指

かざるものの一人であります。

讀者は、すでに御承知でありませうが、上

人が、御臨終に近づかれた夕、その御枕邊に

侍べられた、法蓮房が、憂ひをこめた小さき

——皆、生きるためだ、人間に贖物があ

るからつて、イヤうつかりすると人間その

ものが贖物になりさうだからつて、それは

みんな生きるためだ……。

只、せめて贖物を取りたい、ほんものに

なることの價值と幸福とを熱望して。

○

Kといふ老僧は、今でこそ數萬の金を蓄

め込んで樂むん居みたいな身の上だが、若

い時代には隨分貧乏で苦勞したものだ、こ

とに師匠が並外れた六ヶ敷であつたた

め、三十五歳まで所化の勤めに甘じさせら

れた時代なぞ、明けても暮れても、それこ

そ不平不満のやり場に困つたといつてゐ

る平凡な人間が長い間の被壓迫生活な

ぞをした場合、うれしいにつけ、悲しいに

つけ、染々と身にしみて感ずることの一つ

は、金のことであつたに相違ない、其の時

以來Kが、どんなことをしても金を蓄めや

うと決心したのに不思議はあるまい。

金、金、金、ねてもさめても金がそれから

聲にて、然かも強き信念に燃えた瞳を据へながら、上人の耳元近く、囁いて申された。

『往生の御決心は、すでに深くお定めのことゆゑ、それは改めてお尋ねいたしません、この期に於て、後世の私共のために、御漏し願ひたいことが御座います。』

と、恐る／＼お言葉をかけますと、病み細られた上人は、些した苦痛の色も表はし給はす、従容として法蓮房の方に頭を向けられて「今更に、わたしに尋ねたい儀とは？……いや、わたしの生ある中に、どうぞ尋ねて下され、早う尋ねて下され、それが法のためですから……」

法蓮房は、いつに變らぬ上人の有難いお言葉に思はず、面上を涙に曇らせて、

『はい、では御伺ひ申上げます。上人様。昔の先徳は、みな何れも、一宗を開くためには、

お寺を建てるとか、法筵をされた跡を遺されるとか、各々一宗の根元を明かにしてゐられます。然るに、早や御蔭終に近づき給ふ上人には、未だ一ヶ寺の御寺も御建立になつて居

られません。私共は、今後なにを中心にして上人の御徳を守れば、宜敷いぞございませうか？

恐れながら、御伺ひ申上げて置きます。』

すると上人様は、病苦も忘れられたかのやうに、莞爾と瞳をみ開かれて、

「私の跡を一ヶ所に定めておけば、私の法は一ヶ所にのみ有るごとく思はれます。定めておかなければ、念佛を誦する、その場所／＼が源空の遺跡であります。身分高き人も、身分低き人も、ともに／＼に念佛を唱へて、この世の隅々まで、どうぞ念佛を唱へて下され。その故にこそ、この源空は跡を遺して置きませぬのです。私のこの念願を、心にとめて下され。」

と、いとも懇にさとされてゐられます。

勿體ないことながら、納は、このお言葉を偲びまゐらせるとき、たまらない有難さに噎ばれるのであります。

即ち、上人のお言葉に従へば、念佛を申す、そこに上人の不斷の生命が生きて働き、念佛を申して眺むる世界は、たとへ無碍に蹴つて

のKのすべてになつた、従つて鐵面皮になつた、勿論薄情にならざるを得ない。それでも只一つ感心なことには、師匠にだけは後生大事に仕へたことだ。もつともそれはKの實母が此の師匠にとつても世話になつた關係からでもあつたが。

其の後Kが、實母も師匠も見送つてしまつて、一かどの住持になつて、多年の望みを一つべんに遂げることが出来るやうになつて見ると、さて、かねてからなつたらば、あれもこれもと、それこれ夢寢にも忘れぬ望みではあつたのだが、其處にはモウどうにも始末のつかぬ性格上の固定が出来上つてゐた。

長い屈辱生活に、そのうつ憤を金を蓄めることによつて自ら慰めて來てゐる間、Kの性格は、一切のことを金によつて解決するより外に方途のつかぬ人間になり切つてしまつたことには是非も無い。従つてKは、れつきとした一寺の住持でありながら、かつて一度御本山に詣でたことも

行く、路邊の磔までに、み佛の光明が輝いてゐるのであるぞよ。といふことになるのであります。

更に言を換へて申しますれば、上人の御眼より觀じられますならば、一切衆生、たとへ地獄の苦熱に喘いでゐる餓鬼といへども、みなこれみ佛の姿、念佛の道志に外ならないのであります。

「この世がうるさい。」

「こんな社會は嫌だ。」

とかの言葉は、夢にも申せないばかりでなく、冗談としても餘りに先徳を冒したことゝなるのではありますまいか。

わが曹洞宗の開山承陽大師も御言葉の中に、

「佛でなくては、佛の仕事は出来ないぞよ。」

といふ意味のことを云はれてゐますが、まことに然りでありまして、深く味ふべき言葉であります。

よく人は、眞似は本物でないと思はれてゐるやうであります、衲は眞似は正眞本物

であると思つてゐるのであります。

たとへば、石川五右衛門の眞似をして、人のものを盗めば、それは眞似でなくて、本當の盗人であります、だから直ちに刑務所の厄介にならねばならぬのであります。これと反對に孝行の眞似をして、御兩親の肩を叩いて上げますれば、御兩親は目を細めて喜ばれます。かうなりますと、これは早や眞似でなく、本當の孝行となつてゐるではありませんか。

香嚴といふ人は、自分が外を掃除してゐるとき、掃いてゐた箒の先きに觸れた石が、ビューツと飛んで行つて、向ふの藪の竹に、カチーンと當つた、その音で、お悟りを開いたと云はれてゐます。すると、そのカチーンといふ音が、香嚴にとつてはみ佛の御言葉であり、お師匠様であります。

今、法然上人の御言葉を拜借して、これを考へますと、全くこれと同じ感じを持たせて頂くのであります。

つまり、これが念佛の所在地だ、發唱地だ、

なければ勿論京も知らず大阪を見たことなし、今日老境に及ぶまで、獨身を通して孤獨蕭然其の足は今に居村を出たことなしといふ珍らしい存在となつてゐる。

そのKにも、かつては護法心に燃え立つて、金でも蓄つたら、せめて佛門に入つた謝恩の萬分の一だけなりと……さう何度も思ひつめたのだつたが、その護法心の龍のひげはいつの間にか守銭奴といふ似ても似つかぬ雜草の質物のために蠶食されてしまつたのだつた。

○

Sと稱ぶ、七十近い汚い乞食の婆さんがゐる、此のS婆さんいつの頃からか背中にお椀をふせた位の大きな瘤を出來して、へんな恰好をして歩いてゐる。元來少し足りない處へ、打ちつゞくいろ／＼な不幸のため、いよく汚い乞食婆さんとなり下つてしまつたのだが、問題は背中の瘤である。

今の境界で、勿論本人自身醫者にかゝ

起元地だ、根本道場だといふものを定めてないのでありますから、一切諸物ことごとく念佛のお姿でないものはありません。念佛とは佛の姿といふことでありますから、この世に佛の姿でないものは無いのであります。従つて、「この世をばわが世とぞ思ふ 望月のかけたることもなしと思へば」で、見る世界、聞く世界、歩む世界、觸れる世界、男も女も、老いも若きも、みなこれ念佛のお姿であり淨土莊嚴の極致であります。

山の色谷のひびきもみなながら釋迦牟尼佛の聲と姿、一切萬物は敬ふべきみ佛の當相であります。人を羨むことはりいせん、妬むこともありません。みんなお互に尊いもの同志の寄り合ひであります。間違つて悪い方面に動いてゐる人がありましたらば、お互に誠をもつて出告し合ひ、この光明極樂世界を認識するやうに勧められたいものであります。

夢にも人をけなしたり、陰口したり、徒に光陰を私してはなりません。

國家は寔に非常時であります。同胞互に一致團結、心を淨うして、高く先德の勝鬪を拜しつゝ、國歩の前途に、われ等の足下に、光明をもたらしたいものであります。大變長いことを書きまして、失禮をいたしました。(文責侍者)

## 傳通叢書 第二輯

梅原眞隆述

# 法然上人

四六判美装 定價拾五錢  
六十一頁

深き理解而も憧憬の念に燃えて法然上人の眞隨を最も簡便に吐露した好著  
學深く信仰厚き梅原氏が自己の體驗を通して上人への火の如き傾倒を示された書法然上人を描破した數多い書の中にあつて珠玉の如き輝きを見せる、烈々たる信仰の念を讀者に與へて止まない。

東京市小石川區表町

發行所

傳通會館

らうの意志があるわけでも無い、又出來もせぬけれど、見る方が痛々しくてやり切れない。で、中には親切に膏藥などを取り寄せて恵んでくれるものもあるらしいのだが、本人一向吞氣で一切萬事自然のなりゆき委せ、痛めば小屋にねたまゝ、二日でも三日でも飲まず食はず、直ればのこゝと這ひ出して人の情けに縋つてあるく、――幾ら少し足りないからつて、よくもあゝ吞氣にくらせるものよなア、乞食なんてものは實に偉いものだ、と見る人毎に感心させてゐる。

これが普通の生活をしてゐるものだったらどうであらう、あれ程の病痛を、義理にだつてすてをくわけにはゆくまい、醫者よ病院よと夫れ相應に騒ぎ廻る。相違ない、それが浮世のつとめだと考へられもする。

だがS婆さんの場合に限り、斷然問題では無いのだ。

本人自身、死ぬるも生きるも成るがまゝ

# 極樂ちがひ

—— 竟譽大僧正逸事 ——

淨土宗執綱

野 上 運 外



前々知恩院  
門跡竟譽大僧  
正が知恩院を  
退かれた僅か  
前のことであ  
る。明治三十

五年だつたと思ふ。大阪で最後の御授戒を親修された。それが無事にすんで、供の僧達もほつとしてゐると、僧正は急に思ひ立つたやうに、當時關西の實業界で錚々たる名聲を博してゐた、そして知恩院の檀徒であつた藤田傳三郎氏を訪れたいと云ひだされた。——尤も僧正が藤田家を訪問されることについて

は、僧正御自身にとつて秘められた理由があつたのである。話はそのときから四五年前に遡る。僧正の山口縣御巡教中の出来事である。萩の或寺に宿せられた或夜、更けてから前田と名乗る人品卑しからぬ老婦人の訪問をうけた。僧正が面會すると、その老婦人は傳三郎氏の實姉であつた。お十念がすんで、話が信仰上のいろ／＼の教訓に移つてちよつと途切れたとき、それまで靜かに頭を下げて僧正の言を傾聴してゐた老婦人は、おそろ／＼から訴へた。

「私共の一家は家憲としてみな平日課念佛を勵んでゐるのでございます。兄妹も澤山ござ

なのだから。

イヤそれより外に手段も方法もないのだから。

處が世の中は面白い。

十何年と背負つて來た婆さんの病瘤が、近頃崩れ出して來たではないか、矢張り腫物の一種だつたと見えて、あるだけの汚物が出、流れるだけの膿が流れてしまふと、瘤もつぶれ膿も乾ひて、けそけそと直つてしまつたことだ。而も本人さして喜ぶほどの様子も見えず、相變らず自然のなりゆき委せである。

自然良能といふのか、御方便といふのか動物が傷ついても、自分でナメ／＼いつか直つてしまふやうに、人間も醫療の届かぬ世界へ來ると、人工ならぬ自然の醫療が働くものと見える。それにしてもこれはたしかにしいたげられたものゝ強味、苦難の中に生きるものゝ力、即ち雜草の偉力だ。

いますが、それらがみんな心をあはせ、生きてゐる間は念佛を一所懸命にいたし、やがてあの世へまゐりましたら極樂で再會するたのしみを誓つてゐるわけなのでございます。ところが、どうしたものか弟

の傳三郎ひとりだけが無信者で、いくらすゝめても念佛は愚か、却つて私共を嘲笑する始末です。どうか、さういふわけでございますから、本山にお歸りの節は傳三郎を呼びよせて、上人様のお力で心得を直して戴きたう存じます。」

その老婦人の眞摯な頼みに、僧正はいたく心を動かされて、

「よろしい」と言下に約束されたが、約束され、その場はそれで済んだものの御巡教、法要等に寧日ない僧正の身にあつては、忘れることはなかつたが、その約束の實現の機會を容易に捉へられずにゐたのであつた。――

僧正は丁度いい折だと思はれて、豪莊な藤

田家の邸宅を訪れ、早速立派に飾りつけられた佛間にいられて回向一會をなされた。終つて茶菓の饗應の席上、傳三郎氏夫妻と對ひ合



たじろいたが、すぐ面に苦笑を泛べながら答へた「私は世間の人のよくやるやうに、信心々々とさわぎ立てることは厭ひですが、人に

知れぬやうに自分だけの念佛は唱へてゐるつもりです。珠數もかうして袂に入れてはゐますが、それも人に見せるのが厭だからです。」

然し傳三郎氏の言には何かわだかまりのあるやうな調子がふくまれてゐた。珠數も身につけてゐると云ふが、僧正の回向に來られた日だから當り前として、やはり平生さうなのだらうか、疑ひなきを得ないのだが、僧正は知らん顔で、

「あんたも結構よくしてゐるね」と嘯いた。

ひに座を占められると、僧正は早速きびきびした質問を傳三郎氏に發せられた。

「あんたは日課念佛をされるかね？」

「はあ、それは」不意を衝かれて傳三郎氏は

田家では僧正を網島の別宅へ案内することになつた。案内されてみると、別宅は噓に聞く

以上の豪華なもので、佛間に通るまでの間に數箇の寶物蔵が並んでゐる。佛像、書畫、

その他の得難い逸品のみが藏されてゐる。さて佛間も二階と階下に二つあつたが、佛壇の華曼は黄金づくり。傳三郎氏は得意の色をあらはしながら、僧正に一々説明した。最後に、屋上の見晴臺に僧正を案内すると、傳三郎氏はつくづくとあたり、面の風物を見渡し、「覽下さい。このへん一帯の土地は藤田家の所有です。この大阪でも單に地所持ちといふなら他にいくらもありませうが、これだけに眺望を整へた地所をもつてゐるといふ點で私はいさゝか自慢に思ふのです。」

さう語つた。すると今まで黙々として傳三郎氏に従つてゐた僧正は、ふいに顔を傳三郎氏に向けて吐きだすやうに云つたのである。

「あゝ、成程立派だ。立派すぎるね。……これでは極樂へ往けないはずだ。なぜなら、この世が極樂なもの。」

それで、傳三郎氏は一言もなくなつてしまつた。

一體、その最後の御授戒を勤められた年の

僧正の御様子には、日頃といくらか異つてゐられたやうに思ふ。私など未だほんの小僧時代から親しく僧正のお側へ仕へて來た者にとつても、あの年のやうな僧正の御様子はめづらしかつた。どこが變つてゐたかと云ふと、御自身に接するものすべてに對して、苛酷と申していいやうな峻嚴な態度をとられ、いけなと思ふものには少しの容赦もなさらなかつたことである。

これはその御授戒中の話である。僧正が入堂まへの控の間で寛いでゐられると、やはり大阪市在住の知恩院信徒總代某が拜謁に見えた。ところが、いつもと違つて、總代は次の間に坐らせられたのですぐ不服さうな色を見せた。それをちつと眺めてゐられた僧正は、

「あんたはいくつになるね？」と突拍子もない質問を浴せたのである。

「——七十になります。」總代も呆氣にとられたやうな口吻で答へると、重ねて、

「お念佛を申すかね？」

「そりや申しますが、ふだんは中々忙しいも

ので申せないこともあります。」

「子供さんはあるかね？」

「あります、三十になります。」

總代はなぜ僧正がこんなことを云はれるのか、解せない面持で考へてゐると、暫くして僧正は聲を一段と上げて、

「わしはあんたが總代だから親切に云ふのだが、人間七十にもなつて日課を唱へられないとは情ないではないか。これはあんたばかりでない、わしが佛にすまないことだ。あんたのところは千萬長者ださうだが、そんな心掛ではどうもならん」と叱咤した。

と叱咤した。

總代は眞赤になつて頭を掻きながら退出したが、元來授戒道場などへは總代はたゞ顔見せして去つてしまふものだが、その日の總代は最後まで本堂に留まつて懺悔の念佛を申しををつた。——なほ、その大阪での授戒は盛大を極め、本堂には受者群集して身動き一つ出来ない有様であつた。これも僧正の徳を物語るものとして遺憾がない。

燈とら籠らう大だい臣じん

— 平重盛のこと —

畠

四

郎

さて、治承四年五月十二日の晝時、京都の街に突如旋風が捲き起つて、人畜家屋に夥しい損傷を與へた。風は中の御門京極から起つて、櫓門平門を吹きさらひ、五町十町と吹き持つて行くうちに、桁、長押、柱などは虚空に散在し、檜皮葺、板の類はまるで冬の木の葉の風に亂れ舞ふやうで

あつた。鴛々と鳴りどよむ風音は地獄の業風にも例へやうか。一般人家の倒壊は云ふまでもない。その下敷となつて喚く者、辻に逃げまどふ者、剩へ風は火を呼んで、今までの初夏のみづみづしい京の景色は、忽ち阿鼻叫喚の巷圖と變つてしまつた。……

實際、このやうな天災凶事は尋常でない。かずかずの兵亂は嘗めて來た都びとであつたが、まだかうした天の懼れには出會はないのだ。これは屹度何かの前兆に違ひないその「何か」は明らさまには申し合せられ

ないが、人びとは互ひの胸に、それと暗示し共感できるものがあつた——が、その同じ胸を抱いて、彼等のやうに他人事として看過し得られない焦燥と不安に一入驅り立てられて惱み悶える一人があつた。小松大

臣平重盛なのだ。

父清盛入道の惡逆無道は益々増長するばかりで、やゝもすれば君のみ心を惱まし奉るのである、その振舞を耳聞きするたびに平家の榮華も永いことはあるまいと思ふ。旋風の天災は、それを裏書きする天罰のあらはれではないか。——重盛は三子と

して、機會ある毎に父に諫言を寄せるのであつたが、おのれ一個を貫くために天下に懼るゝものない清盛には、すべて風馬牛だつた。

ところでこの大臣は生れながらに不思議な性格をもつてをつた。日頃度まやかな靜かな起居振舞の中にも、何か事につけて未來の様を豫見するのであらうか、ひとり諦悟と懺悔の入りまじつた心を抱いて吐息してゐた。都に旋風の起つた僅か前の夜の夢に、重盛はかういふことに出會つたのである……濱路遙かに歩いて行くと、傍に大鳥居が立つてゐる。人にきくと、春日大明神の御鳥居と答へる。と、いつかその附近には多くの人々が集まつて來た。その中に一際目立つた荒武者一人、右手の大刀の鋒に法師と覺える首を貫いて高々と打振りながら、「平家太政入道殿の悪行超過し給へるに依つて、當社大明神の

召取らせ給ひて候」と大音響に呼ばつた。はつとした重盛が、群集を掻きのけつゝそ

と打笑ふと、それに和して群集の嘲笑のどよめきが起つた。そして夢が覺めた。



の首のところ近づいて行つたとき、武者は重盛に鋭い一瞥を與へ、やがてからから

と、貞能承つて赤地の錦の袋に入れた御

丁度その折、妻戸をほとほと敲く者があつた。家臣瀬尾の太郎兼康の夜中伺候であつた「今夜あまりにふしぎな夢を見ましたので、申しあげようために早速參上いたしました」とのこと。人を除けて對面すると、彼のみた夢も大臣のそれと寸分違はなんだ。「兼康とて、神に通じたものであるよ」と重盛は深く感銘したが、翌る朝、心に期するところあつてか、院へ參らうとする嫡子維盛を呼び止め、「親の口から云ふもへんだが、御邊は賢しい性ゆゑ一通り申し傳へて置きたいことがある。」

かう云つて、「誰か維盛に酒進めよ」と供の者を呼んだ。筑後の守貞能が御

太刀をもつてまゐつた。維盛は、これこそ當家に傳はる小鳥の名刀であらうと悦びながら受けてみると、さうではなくて大臣葬のときに用ゐる無文の太刀であつた。顔色變つた維盛が、粗忽も甚だしいとばかりぐつと貞能を睨んだとき、

「それは貞能の間違ひではあらぬ。本來なれば御邊の祖父入道殿の身まかり給ふをり、重盛帯いて供せうと思つてゐたが、今はこの重盛が入道殿に先立ち奉るころでをるゆゑ、御邊にしかと渡して置く所存。」

語り結んで、涙の中に重盛はぢつと維盛の顔から視線を離さなかつた。維盛は答へもしなかつたが、父の言葉を頭で打消しながら、心の奥で動かし得ない同感をどうせうもないのだつた……

この大臣はまた、滅罪生善の志が深かつたから、世の浮き沈みを歎き、六八弘誓の願に準へて東山麓に四十八間の精舎を建立した。一間に一つづゝ、四十八の燈籠を掛けたので、九品のうてなの前に輝いて、さながら淨土に臨むやうであつた。毎月十四十五の兩日には一間に六人宛二百八十八人の尼衆が集まつて大念佛會を修した。まことに來迎引導の悲願も、このころに影響を垂れ、攝取不捨の光明も、この大臣を照し給ふかに見えた。だから世人は重盛を指して、燈籠の大臣と申してゐた。

そののみならず、いかなる善根をもして、後世を弔はれたいものだ、といふのがこの大臣の心願であつた。わが國ではどんな大善根をして置いても、子孫相續いで、重盛の後世を弔ふであらうとは思へない。そこで安元年間の春の頃、九州から妙典と云ふ船頭を召し上らせ、金三千五百兩を取寄せ、汝は評判の大正直の者なれば、五百兩をば汝にとらす。その代り宋國に渡つて三千兩をば宋朝に貢み寄せ、その中一千兩をば御門に進らせ、一千兩をば育王山の僧に引いて、重盛の後世を弔はすやうに」と命

じた。妙典は仰せをうけて萬里の煙浪を凌ぎつゝ、宋國に渡つて役目を果したのである。だから日本の大臣、平の朝臣重盛公の後生善所と祈る事が、今も彼地の僧達によつてとり行はれてゐる……

さて、重盛はよろづの事に心細さを味ふばかりであつたのだらう。世に處して良臣孝子の道をひとつに立てられぬくらゐなら、名を遁れ身を退いて來世の菩提を求め、に如くはない。願はくは現世の宿業薄い我身の生命を縮めて、父入道、悪心を和げ、子孫繁榮して朝廷に誠忠を至すやう、と熊野權現その他の神佛に祈願するのであつた。すると夏も酷になる頃、重盛はどつと病の床に臥すことになつた。これ權現の自己の願を受納したしるしに相違ないと思ふと、醫師の療治はもとより、まして祈禱も致さず、一日も早く身の命終を俟つのだつた。その折、宋國からすぐれた名醫が來朝してをつたが、清盛はそれを耳にす

と早速越中の前司盛俊を使者に立て、重盛に醫療を加へる件を申し渡した。が、重盛は肯じなかつた。

漢の高祖は三尺の劍を提げて天下を治めたが、黥布を討つた時に流矢に當つて疵を蒙つた。后が良醫を迎へて見せたところ、醫師の云ふには疵は癒るが五十斤の金を要するとのこと。聞いてゐた高祖は、自分の守が强かつた間は、多くの戦ひに逢つて疵をうけても痛みひとつ覺えるでなかつた。然もはや自分の仕事も終り運も盡きたことを悟つた、命は則ち天にある、かう云つて五十斤の金は醫師に與へたが治療せなんだ。かうした先言がいま自分の耳にある。天心を察せず、愚かな醫療を施しても何にならう。

盛俊は反對に重盛にさとされて、すこす引退した間もなく重盛は病床で出家し、法名を淨運と附したが、秋のはじめ臨終正念に住して失せ給うた。御歳四十三であつ

た。

さて、さすがの清盛も長子重盛に先立たれて、當座は福原に龍居、浮世の果敢なさをかこつてゐたが、それも永くつづかうとは思はれない。

同じ年の十一月七日に、都はまた地震の災に會つたが、その十四日に清盛は數千騎の軍兵を襲いて都へ歸り、おのれの氣に入らぬすべてに對して無理非理を加へた。ま

づ關白殿を太宰の帥に左遷するのをはじめとし、四十有三人の官職を留めて追龍めてゐる。掛替のない子を失うた親が、子の意志とは逆に、世を呪ひきらずに置かない惡鬼の振舞に身を踊らすとでも申さうか、入道相國の惡行はつづいて行つた……。



ノーシンのいいところは  
服む……スツと痛みが消える  
同時に、頭の疲れを恢復する  
……この二つです  
而かも胃腸等には勿論、安全  
で、連用すれば頭腦ばかりか、  
心臓迄も強補する効果あり。  
これでこそ完成せる模範的頭  
腦藥と稱せられる所以！

頭の痛みと疲れに



十三錢・十五錢・一圓・二圓



# 隨筆二題

松岡讓

## 松虫鈴虫

かつて京都の鹿ヶ谷に住んで居た頃お寺の境内をよくぶらつ  
いた。一番よく行つたのは法然院で、春夏秋冬のいゝ季節には、  
大抵日に一度づゝは訪れたものだが、近所の住蓮山安樂寺の石  
段も時々登つた。いふ迄もなく承久法難の住蓮安樂が爲めの寺  
であらう。門前の楓の下に石の標識が立つて居る。それを見て  
居た時にふと門内で鶯が啼き、途端に何氣なしに「老鶯や淨  
土禮讚根元地」といふ句が私の口をついて出た事がある。人の  
句のやうでもあれば自分の句のやうでもある。今でも安樂寺あ  
たりを思ひ出すとこの句がよみがへつて来る。  
本堂前の一段小高いところにごちや／＼な墓所があつて、新

舊もろ／＼の墓が錯綜して居るのであるが、その奥まつたとこ  
ろに松虫鈴虫の墓といふのがある。苔むした豚の脊を思はせる  
鈍重な自然石の上に、小さい塔婆の頭を一尺が程も切り取つた  
やうなといはうか、或は石燈籠の笠の頭をもつて來たやうなと  
でもいはうか、二つの同じ形の可愛いらしいお墓が、やゝ不安  
定にちよこなんと一對の臘燭立てをならべたやうに置いてある  
のである。いつの頃誰が建てたといはうより、誰が置き忘れて行  
つたのかといふにふさはしいのであるが、石のかど／＼がかけ  
落ちて古るびて居るのもよく、殊にかうした名所舊蹟にありが  
ちなデコ／＼な見得ばつたところがなく、いかにも可憐な、あ  
の悲劇の女主人公らしい世を捨てた念佛の行者にふさはしいと  
ころがよい。さうして二つとも同じ形で、いづれが松蟲でいづ

れが鈴蟲であるやらわからぬのもよい。私は贓物の寶物なんぞの風入れをやるこの寺の俗っぽいところを好かなかつたが、その二基一對の古ぼけた、ちつちやな石塔だけはいゝと思つた。ところが寺の名が示すやうに、ここには住蓮坊と安樂坊との墓なり供養塔なりがなければならぬ筈だ。さうしてたしかにかなり大きな石塔があつたと思ふ。あつたとは思ふが、どういふ形でどこにどういふ風にあつたか、とんと思ひ出せない。これは勿論私のあたまが悪くて、たしかに再々見たものを忘れてしまつたのに違ひはないが、しかし同じ時に見た一方の松蟲鈴蟲をはつきり覚えて居て、住蓮安樂の方はからきし忘却してしまつて居るのは、その形が平凡であつた爲めか、そこに私をして信じしめるに足らないうそがあつたが爲めか、いづれ理由はそんな事であらうと思ふが、その外にもう一つの最大な理由は、松蟲鈴蟲といふ七百年前の若い女性の色彩が四條河原に斷罪された二人の殉教の荒法師のよりも、より力強く私を捉へたものに違ひなからう。よく見るとお墓になつても女の力は働くものらしい。生きて居た彼女等が内裏をぬけ出て念佛の修業に立つた時のセンチションが思ひやられる。

## 香典

正月元日、先輩のある博士が亡くなられたのを知つたので、

二日早々小奉書と黒水引とを買はせて、弔問に行くべく香典を包んだ。私の財布は軽く、包んだ一枚の紙幣のあとには、銀貨と白銅とがほんの少しばかり残つただけであつた。その爲め一層故人に對しては満腔の敬意と弔意とを拂ふやうな氣分になつて居た。人がかういふ場合しばしば、陥る一種のセンチメンタリズムだ。

袴を穿きながら、正月早々の弔問も珍らしいなどと思つて出かける仕度をして居るところへ、正月の人とも見えないYさんが來た。Yさんはいつも思ひ切つて貧乏なので、しばしば私に無心を言ひに來るので、彼の顔を見ると私は又來たなとすぐに思ふのであるが、助けなければならぬ義理もなく金をやらなければならぬ何等の因縁もないのであるが、それで居てやるのが別に惜しくもなく、又いやでもないのである。いはゞYさんの人徳とでもいふものであらうが、勿論その要求も大それた額でなく、三圓五圓十圓以上となれば飛切りの額で、そんな時は一年に一度あるかなしで、又さういふ特別の依頼の時には、もう私の室へ入つて來る時からして様子が違つて居るので、私も快くいつも財布の口をあけるのである。考へて見れば變なおつきあひだが、私は社會事業だの慈善事業だのといふものはまるで興味もなし、又盡くす丈けの力もないが、その代りといふわけではないにしろ、とにかくYさん一家を時々多少助ける

位のところで満足をして居るわけだ。一度旅行に出る時靴を買はうと思つて居るところへYさんがかけ込んで来たので靴代をやつてしまひ、まあ自分さへ我慢すりやいゝやと思つて古いボロ靴を穿いて行つたところが、毎朝ホテルのボーイがそのボロ靴をきれいに磨いて、これ見よがしに部屋の入口に揃へておいてくれるのにひどく往生した事があつたが、まさか今日は正月の二日、御年始の例の用件でもあるまいと高をくゝつて居ると、やはりそれなのだ。

暮れから苦しみぬきいぢめられぬいて、一夜あけてホツとするとところを正直者のYさんは元日だけを遠慮して食ふや食はずにころがり込んだのだと思へば氣の毒さは一層で、正月早々の借金話で縁起でもないと思つて顔をするといふより、どうやら暮れを越して来た自分をYさんにくらべて有難がつてしかるべきではあるのだが、それにしてもたつた今しがた自分の財布の中を點検したばかりな私は、どうしてやらうにも手がなかつた。悲觀して居るYさんの顔を見ると、私は内心周章でながらふと思ひついたのは、今しがた袱紗に入れたばかりの香奠の重みだ。亡くなられた博士は名士で、遺族も博士が亡くなられたからといつてすぐに困るわけがないのだ。ところが今日の前に食ふや食はずの男が隣れみを乞うて居る外に仕様がな、博士の靈前に供へる爲めのこの香奠をYをさんに上げよう。死者の供養よ

りも生きた方の救済の方がより大切な、すでに香奠を包んだ私の眞心は充分なのだから、博士の靈も多分喜んで私のやり方を許して下さるだらう。私は心の中でさう勝手な理窟をつけた。さうしてそつと包みの中から紙幣をぬき出して、Yさんの手に握らせた、Yさんは涙を流して喜んでかへつた。

博士のお葬式には私は一枚の名刺をもつた切りで、いはゞ手ぶらで焼香してかへつて来た。非常に親しいといふ間柄ではないにしても、又そんな疎遠な間柄では無論なかつた。少くともかなりの知り合ひとして會場に侍立して一般焼香者に御禮をする位はしなければならぬのだつたが、私はむしろ小さくなつてどつさり識つた顔の居るさうした故人の友人達の侍立してる前を堅くなつてとほり過ぎた。さうして心のうちでは故人も許して下さるだらうと辯解しながら、やはり一人仲間はずれになつたやうで浮ばれない氣持だつた。

文學博士 松原 寛著

## ヘーゲル哲學物語

四六判二四〇頁  
價 〇・五〇

## 哲學概論

四六判三四〇頁  
價 一・六〇

## 西洋哲學物語

四六判二一〇頁  
價 〇・七〇

東京神田 同文館 振替東京一三五番  
駿河臺下 電話神田三二七九

味のある  
實話

# 馬になる氣



日さんは競馬に凝つてすっかり身上を捐つて仕舞つた。始めて競馬に手を出した時に大穴を當てたのが不運のもので、どんなに負けても最初の大穴が目先にちらつき親譲りの少し許りの身代を傾け盡した時に、覗つた大穴に却つて自分が陥込んでゐるのに氣が付いたが、その時はもう手遅れであつた。すつかり呆然として一時は馬鹿見たいになつて、私を訊ねて來たことがある。

「幾位か合力をしてくれんか。」  
ゴルフ服を着込んで双眼鏡なぞを肩から傾めにぶら下げて、颯爽と競馬場を飛び歩いてゐた彼氏を良く知つてゐた私はソレ見たことかと云ふやうな氣持にもなつたが、悄然とうなだれてゐる意氣消沈のこの姿を見ては氣の毒にもなつて、僅かばかりの金で厚意を示してやつた。

ところが、この日さんがそれから一年ばかりまるで姿を見せなかつた。國へ歸つたと人傳手に聞いたが、眞疑の程は解らず、こつちも生活に追はれるまゝに忘れともなく忘れてゐると、この夏の始めに突然、日さんはまた私の前に姿を現はした。驚いたことには、僅かばかりの金を貰つて、影坊子の如く立去つた當時の彼とは異つて、ズボンのヒダもきちんとした瀟洒たる背廣服の日さんだ。彼氏は幾位か昂然たる様子で、借りた金を私に返し乍ら、

「僕もあれから馬になつて……」と云つた。おや／＼この競馬狂はまだ馬が忘れられず、馬でも買つたのかと思つて、「馬に？」と聞きかへすと、實は……と次のやうに語つた。

日さんはあれから東京にも居たゝまれず、母方の里に歸つたが、東京で競馬で身代をすつた狂人が來たと云つて誰も相手にしない。することもなく一週間ばかりぶら／＼してゐると、檀那寺の和尚さんは東京の學校にゐたことあると聞かされて、話相手にはなるだらうと、二三度訊ねて行つては世間話をしてゐる中に競馬の一條をすつかり和尚さんに話した。五十を越して苦勞人らしい様子の和尚さんは、

「競馬ぢや勝つても負るも馬じやらう。」と云つた。

「さうです。」きまりきつた質問に不服さうに日さんが答へると

「あんたが勝ちたいと思つても馬が勝つてくれなけりや、何にもならん。馬だのみでは頼りない話ぢや。あんたが馬になつたら良いじやらうに。そしたら馬も一生懸命に走るからの。」

と云つて、眼玉をぎよろつとさせて日さんをにらむんだ。

日さんはそれで悟つたんださうである。馬だのみの人生では頼りない、自分が馬になつて、人生の競馬場で一六勝負をやらう。

「親爺の友達に心境を語ると快く資本を出して呉れたので、それで元の商賣を始めから遣り直した。」そう云つた日さんの姿は颯爽とたて髪を振つてゐる馬のやうな面影があつた。(三太郎)

## 説小

## 赤蛙

(あかがへる)

## 一瀬 直行

青柳 喜兵衛 畫

五郎兵衛は仁王門の賽銭箱の横に腰を下し、やれ／＼國を出てから今日で三月餘り、長い旅途をあらちらと渡り歩き、年來の希望が漸く達したと思ふと、軽い疲れと、心地よい安心が全身を襲つた。仰くと大提燈が頭の上にとつかり被さり、右手に身の丈程の草鞋がぶらさがつてゐた。それもこれも村を出る時、話にだけ聞いてゐた大ききであつた。

仲見世の方から涼しい風が仁王門を吹き抜けていつた。直ぐ横では子供づれの若い女が涼しい風に足を休めてゐる。五郎兵衛はゲートルの埃を叩きながら感慨深げに眼を細め

た。紐をほどいてゆけば、ほどけた所から疲れが抜けてゆくやうに思はれた。幾百里の道を踏んで来たかと思ふと、日向臭い匂ひが愛しまれた。

故郷の山を下りる時には若葉が日に輝き、山道を勇んで下りた。浅草の石壁に腰を下してみれば、新芽を吹く若木が眼にしみて来る。谷山に沿うて険しい道を下つてゆき、乾いた喉を濡らした一杯の水は冷く旨かつた。これとも長い別れかと思へば、清い水の面にうつつたおのれの顔が、忘れ得ぬ姿であつた。それからと云ふもの徒歩をもつて、村から村へ、

寺や學校に一夜を泊めてもらひ、古い知人の家にまで廻り道をしては幾日か滞在し、呑氣な旅を氣の向く儘續けて来た。そして最後には浅草へ着くことであつた。浅草の空の下に餘生を楽しむことであつた。

女房のハナに死なれてからと云ふもの、彼はこの世に總べての望みを失つたやうに、元來陰氣な男が一層燃つてしまつた。ハナの野邊の送りを型通りすませた或一日、今までのやうに山へ入つて、太い杉の根に鋸を入れたが、矢張りチツとそこにさうしてゐることがたへられぬ淋しさを抱かせた。何故かしらないが、どうかしてもらひたい焦心であつた。木肌を喰ひ込んでゆく鋸の齒を見ては、直ぐと手を休めてしまひ、道ばたの木かげに休み、ボンヤリしてゐた。そして山鳥の聲を聞いてはビクツとし、又慌てて鋸の柄を握つてみるが長くは續かない。背後から誰かが襲つて来るやうな不安をおぼえた。氣の抜けたやうな五郎兵衛の眼の前に白日姿を現すのは死んだ女房の面影であつた。ハ

ナはもう死んでこの世にゐないと思ふと、生  
 前の姿は消え、今度は彼女の呼び聲  
 が新しく聞えて來た。若く死んだ女  
 房が戀しい。彼女の聲を耳をすまし  
 ながら木かげに休んで聞いてゐるこ  
 とは、この上ない楽しい日課であつ  
 た。

ふと彼女の聲を餘りに近く、然も  
 はつきり耳にしたので驚いて振向い  
 てみたら、一太郎の聲だつた。一太  
 郎とはハナの連子であつた。自分の  
 子のやうに可愛がることの出来ない  
 何物かが常に二人の間を阻み、つと  
 めればつとめるだけ、それを強く知  
 つた。一太郎の中にハナを愛さう  
 とすれば、縁もないあかの他人を見  
 付け出し、思はず横を向いてしまつ  
 た。彼女の亡き今日彼には一つの心  
 の重荷であつた。

一太郎は叢を掻き分け、彼の背  
 後から姿を現すと、細い道をとび越し前方に

廻つて、客が來てゐることを、彼に告げた。

である弟が、一太郎を引き取りに來たのだ。

勿論一太郎の知るところではない。

さうして彼を弟に託し身輕にな  
 ると、一人故郷をとび出し長い旅を  
 ポソ／＼と續けた。

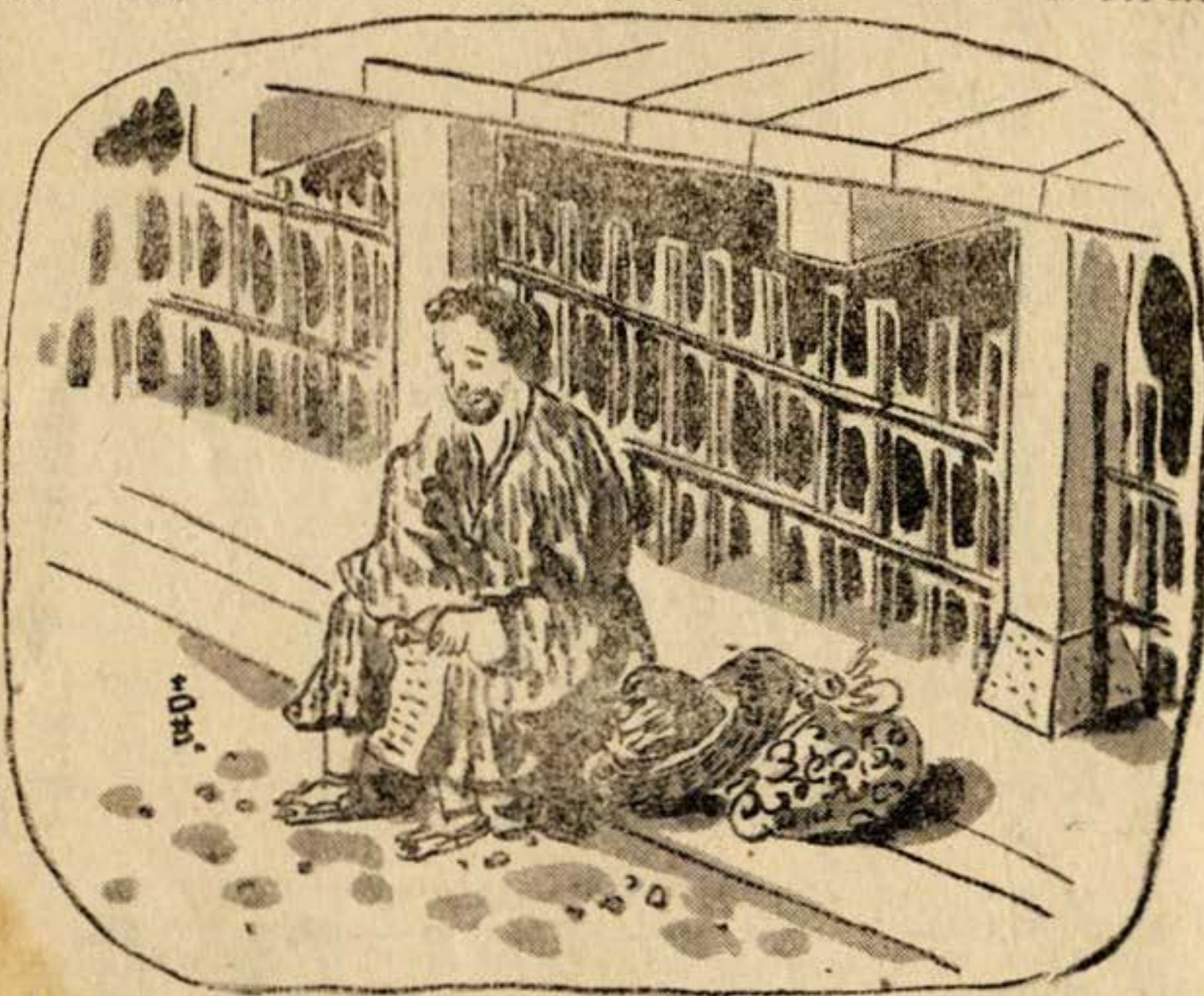
五郎兵衛は暫らく足の疲れをそこ  
 に休め、賑かな浅草の空の下に、こ  
 れから住まふのかと思へば、望みの  
 達した喜びにソワ／＼と落付けなか  
 った。先づ一通り見て歩く前に、何  
 か國から便りが來てはゐないかと、  
 この三月餘りの間の國からの消息を  
 知りたかつた。國を出る時に便りを  
 する時には、浅草觀音堂の軒下へ。  
 とたゞ書いてくれと、弟に云ひ残  
 し、村の者に云ひ残して出て來たの  
 である。

五重塔の尖塔は夕日に輝き、公孫

樹の枝には鶉がとまつてゐた。露

天商人は屋敷を片付け、ザワ／＼し

た氣配があたりにたゞよひ、彼には皆目見當



かねてから頼んで置いたたつた一人の身内

の付かない心地で、一々眼に見、耳に聞くものだと驚きであつた。

勿論観音堂の軒下に郵便物を受け付ける設備が出来てゐるわけではない。正面の階段をのぼり、どこでどうたづねたらわかるか、ウ

ロ／＼してゐた。お堂の外廊を廻つてみたり、堂内の薄暗い中をうろついたりしてゐると、「お神籤はこちらですよ。」と云ふ聲を聞いた。

「その、實はその……。まことにその……。」

五郎兵衛はどう云つてよいか。すつかりまごつてしまつた。が、これ／＼斯う云ふものだが、國から便りがといてゐるか、どうか、早口に一度に云つてしまふと、ボカンと口を開け、暗い奥にもつた蠟燭の澤山の光りを眺めた。

「そんなものは来てゐないと思ふが、ちよつと待つてごらんなさい。兎も角一遍調べて来てあげるから——。」

その意味を呑み込めなかつた風に、袴をつけた老人は眼鏡の上から胡散臭さうに眺めてゐたが、一度奥へ姿を消した。

暫らくそこに待たされた。やがて白い封筒と二三枚のハガキを持つて、老人は再び彼の前に現れた。

「あんたの名は何んと云つたけね……。」

「安井五郎兵衛と申しやす。」

「それぢや、この封筒があんたの所へ来たものだらう。もう二月も前に来てゐたんだが、こつちでも仕末に困つてゐたのだ。兎も角とつておいてあげたよ。住所がはつきりしてゐないのだ。たゞ淺草觀音堂軒下とだけしてゐるだけだ。軒下の安井五郎兵衛としてね。」  
二度も三度も老人の前に頭を低く下げ、封筒をいたゞくやうにして受け取り、裏返してみると、間違ひなく弟の最初の便りであつた。

「その後如何に御座候や、長い旅途さぞかし御不へんも多く、御安着の程祈り居り候、さて突然ながら兄上よりおあづかり申候。一太郎儀さる三日家の中にて不つ合を致し、そのまゝ家をとび出し、今だ行方わからず候、當方甚だ困きやく致し居候、八方に手を擴

げ候へども今だ不めいにて、或は兄の後を追ひ、上京したるものではなきやと存じ、問合せ致し候、かんとくの不ゆきとゞき申譯なく、取りあへず事情を申し述べ候間、宜しくおとりはからひ下され度候也。」

拙い字で右のやうなことが、ボツリ／＼と書いてあつた。暗いベンチの上で外燈のあかりを便りに、五郎兵衛はやつと讀み終へた。家の中にて不都合を致し、とは弟の金を盗んでとび出したものであらう。五郎兵衛は大きな嘆息をつくくと、大體の見當をつけた。

それから後十日間と云ふもの毎日毎夜めぐるしい生活が續き、追ひ廻されるやうにたつていつた。

淺草は廣い。淺草は毎日見るたびに新しい。何時の間にか五郎兵衛は浮浪者の一人に加へられ、仲間うちに相棒が出来、次ぎから次ぎへ新顔に紹介されていつて、そのたびにやす酒の一杯をおごつたり、時にはおごられたり、ベンチや土臺石の上にゴロ／＼して夜をあか

し、面白おかしく日はたつていった。

五郎兵衛は今日もしたゝか酒に酔ひ、一人池の端のベンチに横になつた。時々蠶蚊が酒の臭氣を嗅いでとんで來、その度に眼をさまされた。そして、こゝらあたりで財布の紐をしめようと考へたりした。國をあとにする時、家財道具を賣り拂つて身に付けて來た。そんなことを思ふとねつかれなかつた。こんな風に餘生を送ることは國を去る前に考へてゐたより、餘程楽しく、然も生れながら身にはまつてゐるやうに考へられた。怠惰な魅力が氣持よかつた。

ベンチの下に蟲の聲を聞き、冷い風が足裏を撫でていった。六日の燈火は消え、夜はふけていつた。酔つばらひのうたふ聲と、池の面にはねる鯉の水音に、彼はねむりを奪はれてゐた。

國にゐた頃、山に入つた秋ぐちのことが思ひ出される。ウツラ／＼してゐると、死んだハナが耳元に來てさゝやく。山へ木をヨリに入つた後から追つて來たハナとの新婚當時の

ことが現れる。それはすつかり忘れ去つてゐた筈である。

五郎兵衛は固い床に寝返りをうたうとした時、突然ハツと眼がさめた。ハナの聲を直ぐ近くに聞いた。淺草の夜の空にはつきりとききとつた。

この野郎ふざけるな、と云ふませた子供の聲にまぎつて、負けやせんぞ、と云ふ聲。互にもつれ合ふ氣配に彼は思はずベンチから立ち上り、植込に隔てて池の石橋の袂まで出てみた。聲のする橋下を覗いたら、五郎兵衛又も膽を潰してしまつた。池の淺い箇所は月光が白く光つてゐ、小石の並んだ橋脚のわきで、黒い二つの塊が上になり、下になりしてゐた。

五郎兵衛はどかつと打ちのめされ、驚きのうちに叫んだ。

「何んや、これこれッ、一太郎やないか！」  
烈しいとつくみ合ひにあきれ、暫らく見てゐたものゝ相手の方が大きく強く、一太郎が裸にされてゐるのを見ると、拳に力を入れ、

「負けんな。それさうや、うんと叩けッ！」  
橋の上から聲をしばつた。今までに経験したことの無い一太郎の中にハナを思ひ、可愛さが胸をつき上げて來た。

### 三浦觀樹將軍の信仰

私が三浦觀樹將軍に逢つた時、膽力はどうすれば出来るかと聞いて見たところそれは宗教心が必要だノ、こつちは、阿彌陀佛信者でノ。禪もやらんでもないが、宗教は他力に限る。他力でなければ本當の宗教の價值はあるまいノ。軍人の仲間には宗教ををかく思つたりするものもあるがあれは間違つてゐるノ。南無阿彌陀佛を唱へて手を合せて拜むのがなにがをかしいか。君方の方でも失敬をやるではないかとわしは云つてやつたと云はれ將軍は自分の手を額の邊まで上げて敬禮の眞似をして見せられた。

(野依秀市氏談)



相州大磯町

# 鳴立庵の記

うつ向いて澤の音きく時雨かな——昔人

心なき身にもあわれは知られけり

鳴立つ澤の秋の夕ぐれ

とは西行法師が東海道行脚の途中大磯のうら  
淋しい景色に心うたれてよまれた歌、今はそ  
の澤らしいものはないが、小さい川が庵の横  
を流れてゐる。

庵の向ひ側にあるのが圓位堂、文覺上人作  
の西行圓位上人の像が安置されてゐる。

暑い中をやつて来たので早く海岸の涼風に  
當るべく、柴扉を出れば眺望千里、芭蕉の句  
「大島の櫻咲きしか花ぐもり」、とは海の彼方  
にかすかに浮ぶ大島の影を眺めて咏まれたも  
のだらう。今日は大島は見えない。

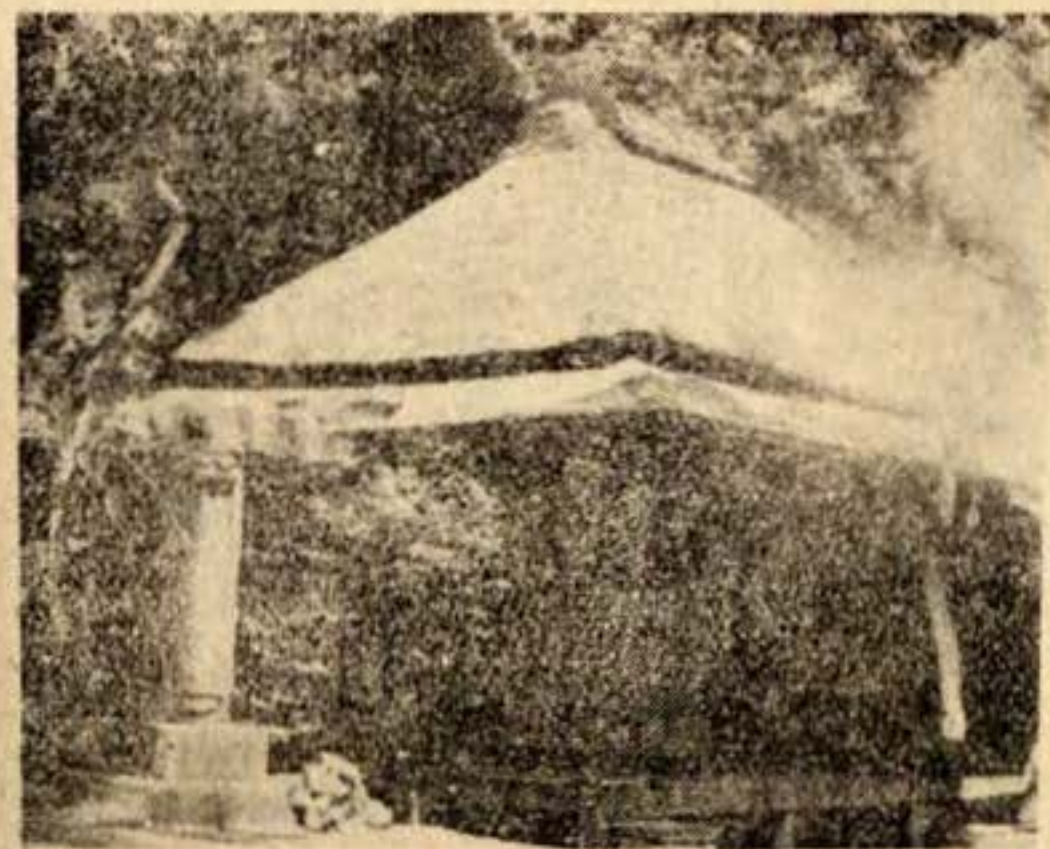
濱は海水浴のお客で賑

である。大小のカツバ連が眞黒になつてあは  
れてゐる、一寸と飛びこんでお仲間入りをし  
ようか、庵の境内には松の大木がある、名木  
小餘綾の松は沖に出た漁師の唯一の目じるし  
になると云ふ名木、今は年老いて枝先が折れ  
てゐる。

現庵主十七世時處人老を訪へば早速の御馳  
走の冷へたのに舌づゝみを打つ。

「日盛りや寛に桃の浮かせあり——津留女」  
堂の向ひ側に法虎堂と云ふのがあるが、此  
は曾我十郎の妾虎御前の像を安置した堂であ  
る、色取られた木像を見れば、なまめかしい  
乙女の面影が偲ばれる。十郎が富士の裾野で

討死した報を受けた虎御前は世をはかなん



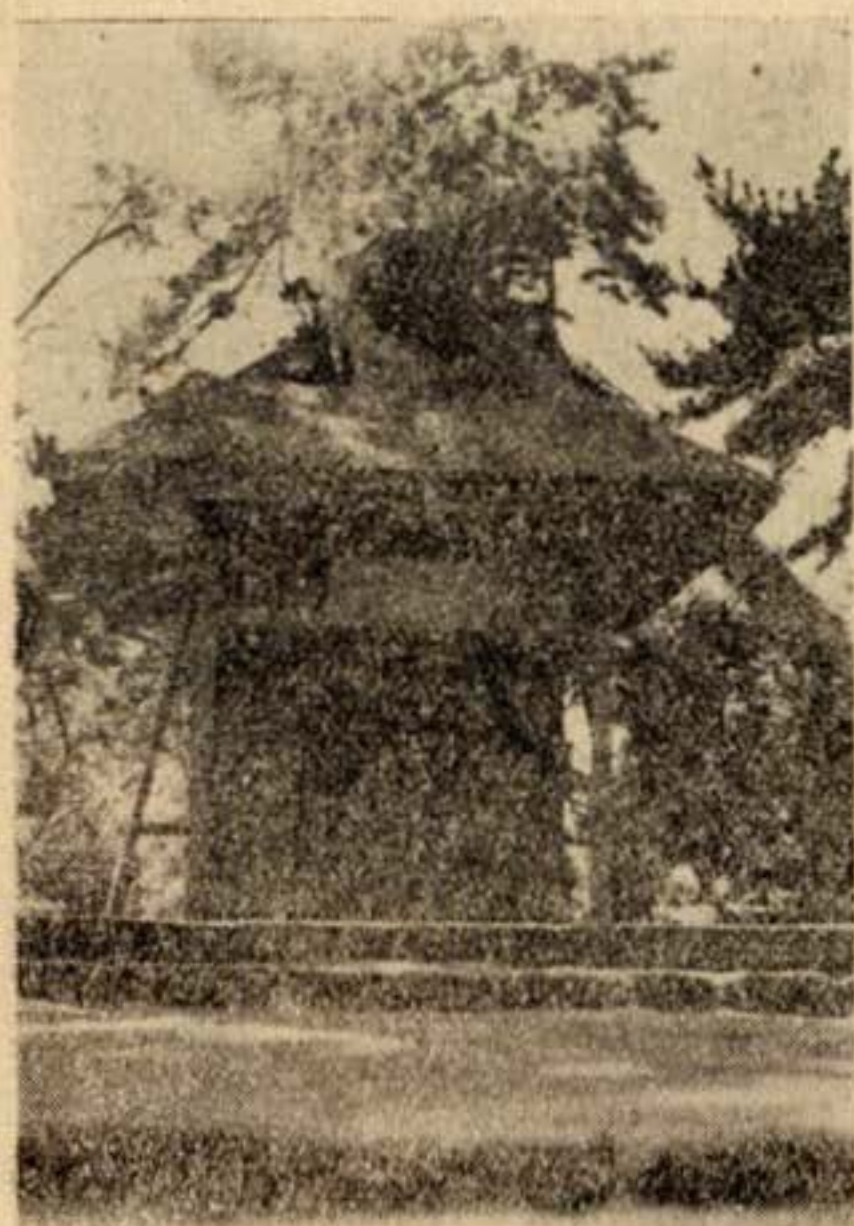
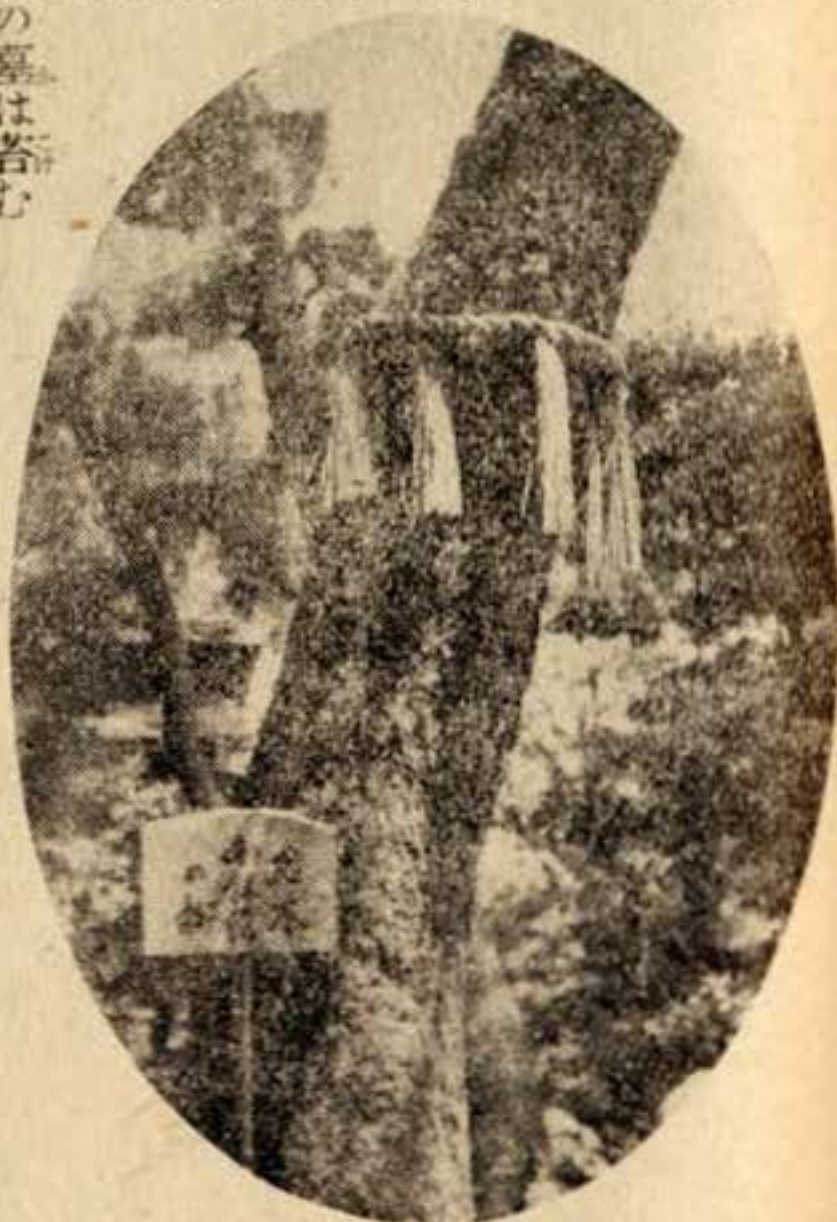
庵 立 庵

で佛門に入り、長野善光寺参拜の旅へ立つた、其の時年僅に十九歳との事、乙女の憐さが偲ばれる。

「木像の口紅冷し法虎堂一萬十

其の後大磯の地に住し此處で没したのである、せまい境内ながらなか／＼道跡の数々がある。現庵主建立の福德観音堂は木の香の漂ふ新しい御堂で、唐土渡來の観音石像が奉安されてある、累代庵主の墓は苔むして、庵の不朽をお守りしてゐる様だ、句碑も

鳥の巢の高く吹かれて海のはれ——時處人



堂 位 圖

なか／＼多い「龍神の歩む跡よりもゆる岬——蘇迷」、西行法師笠懸けの松と云ふのが、長い枝を垂れて歴代庵主の墓を覆ふてゐる、美しく箒目のついた砂の上に二ツ三ツ松笠の落ちてゐるのもうら淋しい。波の音、松風、西行の氣持や、芭蕉の境地が少しわかる様な氣

### 念佛一番槍

加藤清正がその子に語つた話として、自分は初陣の時、一番槍をしゃうと先頭に立つて進んで行つた。坂を登ると數人の敵がおつたが目先が眞闇になつたやうな氣がしたので、「南無阿彌陀佛」と唱えて突入すると確かに手こたへがあつて一人を斃した。それから心が開けて目の前が明るくなつた、と。

がする。

(赤尾生)





う か 悟 の 夜

國枝史郎  
中島松二画



## (一)

浅右衛門といふ香具師が、旅宿をとりそこなつて、木曾の山路を歩いてゐたのは、享保元年九月のことだつた。

寒國の、殊には高原の木曾なので、氣候は寒く、夜風は肌

に沁みた。

(早く、どこぞの驛へ行きつきたいものだ。)

と浅右衛門は思ひながら、心細く路を辿つて行つた。

すると、行手の高い崖の縁に、四十ばかりの大男が、大刀を腰に横たへ、立ちはだかつてゐる姿が鋭い月の光に照らされて見えた。

(やれ嬉しや、人に逢ふことが出来た。人里へ出られる道を尋ねることにしよう。)

と浅右衛門は喜び、その男へ近より、

『道に迷つた旅の者でございますが、人里へは何う参つたらようございませうか?』

と訊いた。

するとその男は、つく／＼と浅右衛門の姿を眺めたが、

『教へてやらう、従いて来い。』

と云つて、崖に添つて歩き出した。

浅右衛門は従いて行つた。

『先に立つて歩け。』

と、その男は云つた。

そこで浅右衛門は先に立つて歩いた。

『首にかけた包は何んだ?』

と又その男は背後から聲をかけた。

『はい、この包は……』

と云ひかけたが、浅右衛門は黙つて了つた。

旅用の金が這入つてゐるからであつた。

『その包を此方へ渡せ。』

と、その男は嚇すやうな聲で背後から云ひ、

『渡さない時にはこれだぞ。』

と、刀の鐔を鳴らした。

(これは追剥だ、大變なことになつた。)

と浅右衛門は胸顫いをした。

(驛々で稼ぎ溜めた金を取られたでは生きてゐる甲斐もない

どうせ死ぬのなら悪漢をも殺して……)

と彼は覺悟を定めた。

崖も特に險しく、崖下が岩疊になつてゐる所へ差しかゝつ

た時、

『ではこの包をお預けすることにいたします。』

と云ひながら、浅右衛門は包を解いて差出した。

しかし、追剥が、迂闊に手を出したところを、その固い金包でしたゝか撲つた。

ワツといふ悲鳴をあげ、顔を両手で押へ、追剥は崖から轉がり落ちた。

(助かつた。)

と浅右衛門は溜息と共に思ひ、無宙で走つた。

どのくらゐ逃げたか、浅右衛門は自分でもわからなかつたが、行手に幽な燈火の光を認めた時正氣ついた。

(やれ有難や、人家へ出られた。柚夫の小屋であらうと乞食の蕨張

であらうと、頼んで泊めて貰はう。)

と、浅右衛門は、燈火の射す方へ走つて行つた。

行きついてみると、その家は、荒れてはゐるが、普通の平屋建の農家で、燈火は、雨戸の隙から洩れ出てゐるのであつた。

浅右衛門は門の戸を叩き、

『行きくれて宿をとりそこなつた旅の者でございます。どうぞ一夜の宿をお貸し下さいまし。』

と云つた。

しばらくの間は、屋内からは、何んの返辭もなかつた。

でも、やがて門の戸が細目にあいて、女の白い顔が出た。

『それはお氣の毒な。……では兎も角もお這入りなさりませ。』

とその女は云つた。

(地獄で佛といふのはこのことであらうか。)

などと思ひながら、浅右衛門は屋内へ這入つ

た。

土間から直ぐに板ノ間になつてゐる、その板

ノ間には圍爐裡が切つてあり、そこでは、焚火

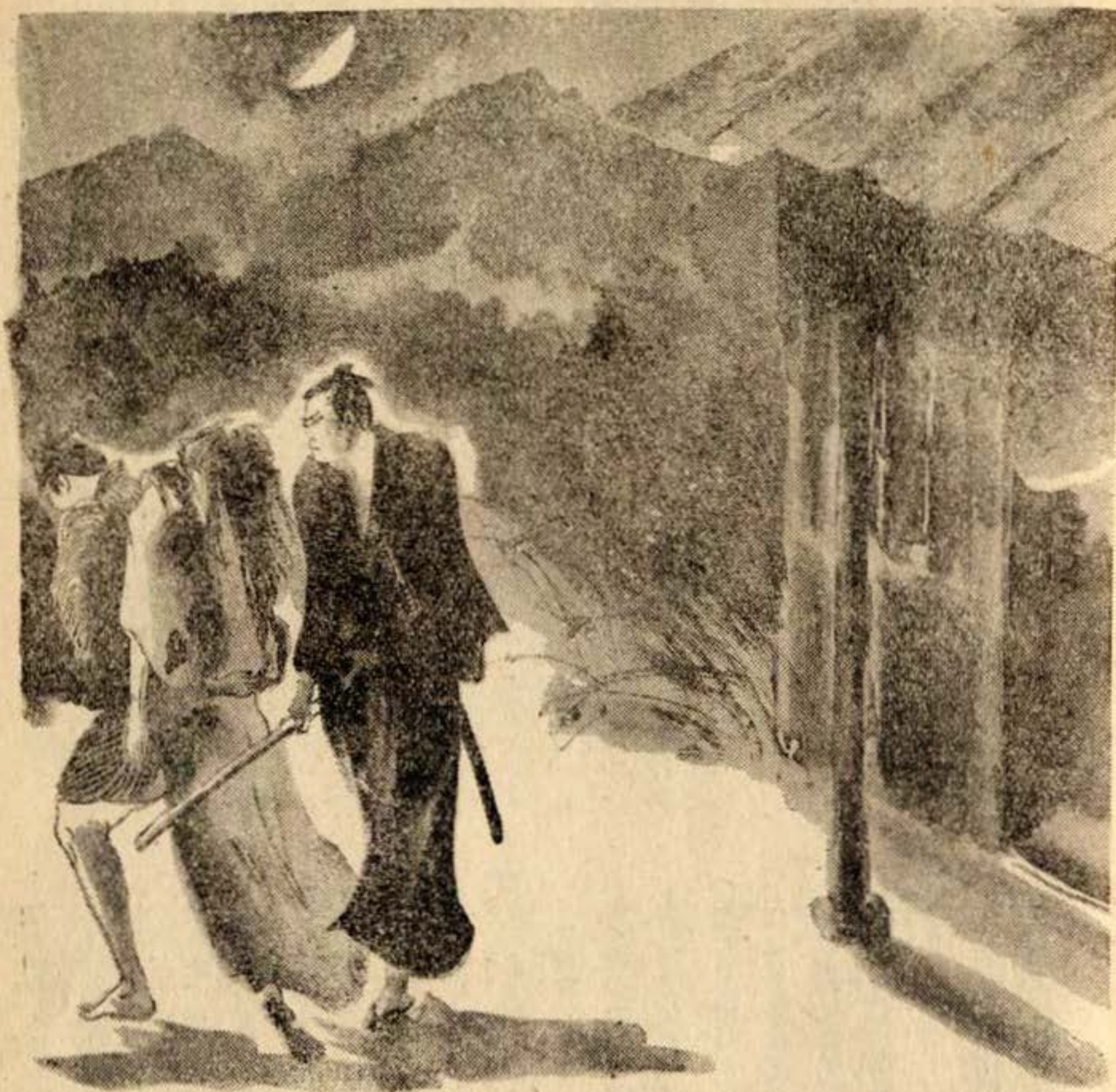
が燃えてゐ、藥罐に湯がたぎつてゐた。煤けた

壁には、熊の皮だの猪の皮だのがかけてあつ

た。

主人は女一人のやうであつた。





こんな山の中の一軒家に、若い女が一人で住んでゐるのは變だと思つたものゝ、宿を借りた身分で、立入つた詮索も出来ないので、浅右衛門は黙つてゐた。

女は、

『お肚がお空きでしたら、雑汁でもこしらへてあげませうか。』

と親切に云つた。

『いえ、それには及びません。つかれてをりますので、早速休ませていただきます。』  
と浅右衛門は云つた。

## (二)

女が隣室へ床をのべてくれたので、浅右衛門は寝た。

少しトロ／＼としたやうであつた。

その時門の戸を叩く者があるやうであつた。その音に眼をさまして浅右衛門は聞耳を立てた。

女が立つて行つて戸をあける音が聞え、土間で、外から這入つて來た男と話す聲が聞えた。

「遅かつたぢやアないか。」

「崖つぶちで旅の男と逢ひ、そいつを刺ぎそこない、あべこべに崖下へ突き落とされたからさ。……ひどい目にあつた。見や、この通り手も足も傷だらけだ。」

「そいつ、どんな男だつたえ？」

「三十五六の、香具師風の男だつた。」

「おや、その男なら奥の部屋に……」

急に聲が秘まつた。

（しまった！）と浅右衛門は思つた。（こゝは追縛の巢窟だつたのだとんだ所へ泊まつたものだ。逃げなければならぬ。）

——で、窃つと起上がり、奥の襖をあけ、縁へ出、雨戸をあけ、庭へ飛下り、一散に逃けた。二三町も走つた頃、浅右衛門は振り返つて見た。數人の者が追つかけて來た。ハッツと太い息を吐き、浅右衛門は又走り出した。背後からは竹法螺の音が聞えた。すると、この邊は、小さい部落で、丘の蔭や、林の傍に、飛々に家が立つてゐたが、その家々から人が飛出して來て、浅右衛門を追つかけて來た。（大變なことになつた。この邊一帯追縛の巢だつたのだ。助かりさうもない。どうしたらよからう。）

恐怖で足が縮むのを鼓舞して、逃げられるだけは逃げようと、浅右衛門はひた走つた。

大きな林へ來た。

浅右衛門は林の中へ走込んだ。

でも、追縛の群は、彼の四方から、彼を目差して追迫つて來た。

（もう不可ない。）と思ひながら、矢張り、連れられるだけは連れてみようと、傍の巨大な椎の木へ上り、繁つた葉蔭にかくれた。追縛どもは、間もなくその木の下に集まつたが、口々に、

「急に見えなくなつたのは何うしたことだ。」

「外へ行く筈はない、この邊に隠れてゐるに相違ない。」

などと云ひ合つた。

と、弓を持つてゐる一人の追縛——浅右衛門を刺かうとしたその男が、ふと梢を見上げたが、

「ヤア彼奴、あそこに居るわ。ワッハッハッ、木の上に居るわ。見えなくなつた筈よ。葉蔭にかくれてをるわ。」

と叫び、矢を差向けた。

（いよ／＼駄目だ。）と浅右衛門は觀念して思はず南無阿彌陀佛と云つた。香具師などといふイカサマの商をして、浮世を七分三厘にくらしてゐた彼は、曾て佛の御名など唱へたことはなかつたのであるが、命の瀬戸際になつたので、思はず唱名したものらしい。

弦音がした。

「あッ」と浅右衛門は悲鳴をあげた。彼の頭上の木の又から、巨大な熊が肩に矢を立て、地へ轉がり落ちた。

手負熊は、弓を持った男を噛み斃し、數人を噛み伏せた。迫り共は四方へ散つて逃げた。熊は夫れを追つて走つた。

『助かつた！ あッ、助かつた！』

涙をボロ／＼こぼし、齒をガチ／＼鳴らしながら、淺右衛門は叫んだ。

『お蔭で お蔭で、助かつた。』

### (三)

一時間あまり経つた頃、淺右衛門は、一軒の家の、一間に寝てゐた。

あれから彼は、木から下り、無宙で歩いた。すると一軒の家へ出た。そこで彼は宿を乞うた。家には、若い、仇つばい、女房が一人ゐたが、それはお氣の毒な、泊めてあげませうと云つて、彼を家へ入れ、一間へ寝かした。

それが此處なのである。

燈火の無い闇の部屋で、布團の上に腹這ひになりながら、眠られない眼をバチ／＼させ、彼は考へ込んでゐた。

(この家も女一人だ。……先刻の家も、女一人だつたが、そのうちにあんな事件が起こつた。……二度と、あんな事件が起こらないやうに。)

強迫観念から、こんなことを思ひながら、彼は、いつ迄も眠らう

とはしなかつた。秋の夜は容易に明けようとはしなかつた。風が、葉を散らす音が、しつきりなしに聞えた。亥の刻頃になつた時、門の戸を叩く音が聞えた。

(そりやこそ！)と淺右衛門は思つた。(門の戸を叩くわ！先刻の家でも門の戸を叩き、それからあんな恐ろしい事件が始まつた。こゝでも門の戸を叩き出したわ。恐ろしい事件が始まるに違ひない。)そこで彼は金包を抱いて布團から起上がり、耳を立てた。女房が門の戸を開ける音が聞え、土間でヒソ／＼話す聲が聞えた。でも、何事も起こらず、男と女とが親しさうに囁き合ひながら。隣室へ行き、寝たらしい様子がした。

(然うだつたか。)と淺右衛門はホツとして思つた。(亭主が歸つて來たのだ。さうして寝たのだ。)

そこで彼も寝たが、矢張り眼が冴へて眠られなかつた。だん／＼夜が更けて行つた。家の周囲を廻りながら、妖しい聲を立て、啼くものがあつた。餌を求めに來た鵲なのである。

と、またもや門の戸を叩く者があつた。

(はてな。)と淺右衛門は思つたものゝ、以前ほどには恐怖もしないで、寝たまゝで聞耳を立てた。

隣室から誰か起き、門の戸を開けたやうであつた。途端にツツといふ悲鳴が起こつた。

(そりやこそ！)と淺右衛門は剣起き、命より大切なくらゐる金包

を抱いて、闇の中へ立つた。

でも、その後は森然となつて、物音は聞えなかつた。

(どうしたことだらう?)

その静なのが却つて物凄く、浅右衛門は身動きさへ出来なかつた。

と、また隣室から一人出て来たやうであつたが、

『とう／＼やつたね。その方がいゝよ。……宿を貸した旅の男をどうしようねえ。』

と云つた。女の聲であつた。

『幸ひだ。そいつに手傳はせよう。』

と男の聲が云ひ『旅のお方、旅のお方と!』

同じ聲が呼んだ。

浅右衛門は觀念して部屋から出た。

彼の眼に見えたものは、若い、なまめかしい女房の寝巻姿と、四十がらみの、太々しい様子をした、でも、なか／＼美貌の、これも寝巻を着た男の姿とであつた。

その男は、浅右衛門を見ると云つた。

『宿賃代りに仕事を手傳つてくれ。……あいつを擔いで行つてくれ。』

浅右衛門は、その男の指さす方を見た。

士間に一人の男が斬斃されてゐた。

死骸を背負つたみじめな浅右衛門が、女の良人を殺した姦夫に追ひ立てられて、月光の蒼い林の中へ這入つて行つたのは、それから間もなくのことであつた。

その浅右衛門が、姦夫に強いられて、姦夫の持つて来た鋤で、殺された男の死骸を埋める穴を掘り出したのも、それから間もなくのことであつた。彼はグタ／＼に疲勞れてゐた。なか／＼穴も掘れなかつた。傍で見えてゐた姦夫は、たうとう業を煮やして云つた。

『生地のない奴だ。俺が掘る。鋤をよこせ。』

さうしてその男は浅右衛門から鋤を取り、大肌を脱ぎ、汗を流しながら掘り出した。

その様子を見ながら、浅右衛門は考へた。

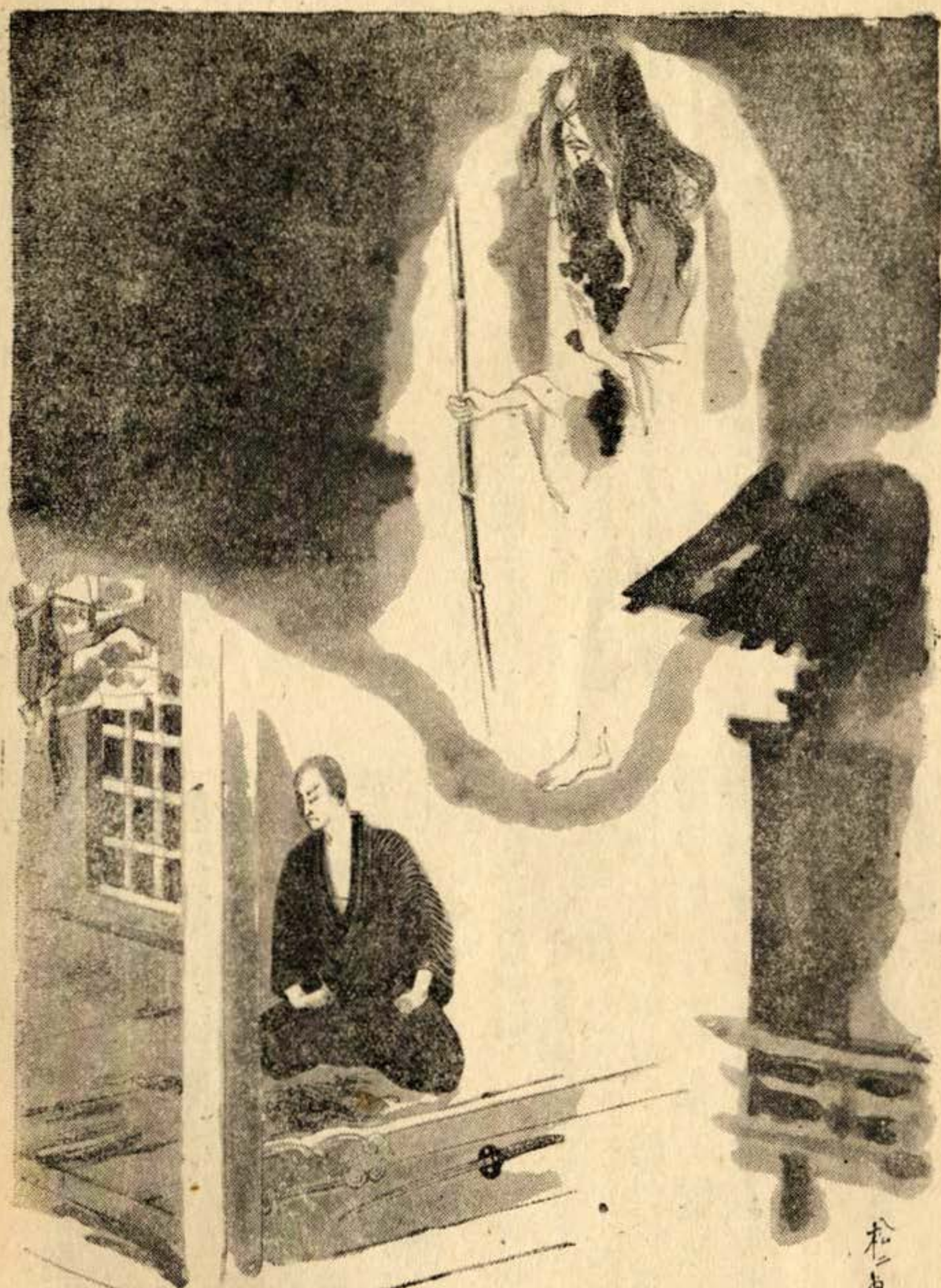
(穴が掘れて、死骸が埋められたら、俺は殺されるだらう。秘密を知つてゐるのだから。……殺されるくらゐなら、いつそ俺の方でこの男を……)

側に、その男が、女の良人を殺した血刀が落ちてゐた。それを浅

右衛門は窃つと取上げた。さうして、姦夫の背後から、姦夫の首へ『天罰だ——ツ』と叫んで斬りつけた。

首が地に落ちた。

それを見すて、浅右衛門は女の家へ引返して行つた。置いて来た



金包を取返すためであつた。

家の門まで行くと、女が立つてゐて、

「おや、お前一人歸つて來たのかえ。……あの人は？」と訊いた。

其處を、

「天罰だ——ッ」と叫んで、淺右衛門は女の首へ斬りつけた。女の首も落ちた。

(四)

家へ這入つて金包を取り、血刀をさげたまゝ淺右衛門は、よろめきよろめき山道を的なく歩いて行つた。

(恐ろしい浮世だ。一夜の中に、何んといふ恐ろしいことが、次々に起こつたのだらう。こんな、木曾などといふ山國で。……あゝ、何處にも安心して住めるやうな土地はないものと見える。)

こんなことを漠然と感じながら、よろめき／＼歩いて行つた。藪の蔭から野狐が覗き、木の枝から夜鷹が窺つてゐることなど、彼には氣づかなかつた。

月は半分傾いたが、まだ夜はなか／＼明けさうになかつた。

行手にあたつて、また幽な燈火の光が見えた。

(燈火の光には驚いた。行つてみると人家で、そこに一人の女がゐるといふのだらう。女一人には驚いた。)

かうは思つたものゝ、矢張り燈火の光は戀しく、其方へ歩いて行

つた。

行きついてみると、人家ではなく、軒傾き、格子戸破れた古宮で燈火の光は燈明であつた。

(けつくこの方が可い。拜殿を借りて休まう。)

彼はかう思ひ、拜殿へ體を横仆へた。

心身ことごとく疲勞れきつた彼であつた。彼は間もなく眠つた。

と、その時、一つの人影が彼の方へ近寄つて來た。髪をさばいて顔へ下げ、肩から胸へ血を浴び、竹の杖をついた、跣足の男であつた。顔の蒼さは柏の葉のやうであり、朱をさしたやうな眼の赤さは、はいかみのやうであつた。さうしてその男の全身は、螢火のやうな光に圍繞かれてゐた。

淺右衛門の前まで來た時、

「わたくしことは、伊奈高遠の藩主でありますが、同僚の讒言により浪人し、この土地に住みつきましたところ、従ひ來ました家僕の權三と申すもの、わが妻と通じ、ご存知のとほり先刻、わたくしを斬殺しましたところ、其方のお力にて、瞬間に仇を討つことが出來願患の焰消えましてござります。あまりの嬉しさにお禮を申しに参りましてござります。」

と云つた。

『さてはそのやうな事情でございましたか。』

と、淺右衛門は思はず云つた。

その途端に眼がさめた。

夢だつたのである。

拜殿の上へ起き直り、浅右衛門は考へに沈んだ。

(金、女、慾、痴情……それらが輪廻して殺人、追縛、私通となる……厭な人の世だ！)

この時までも持つてゐた血刀へ浅右衛門は眼をやつた。

その血刀を頭上にかざして浅右衛門は髪を切落とした。

(わしは出家しよう。……いや、わしは出家した。)

× × ×

間もなくこの土地へさゝやかな草庵が出来、出家した浅右衛門が日夜經讀む姿を見られるやうになつた。拙夫や職師が訪ねて来て、浅右衛門坊の法話を聴くやうになつた。

以前は香具師として諸所國々を經巡り、あらゆる土地の、あらゆる人情、風俗、名所、舊跡、珍話、奇談に通じてゐる彼が、それらを材料とし、因果應報の恐ろしさ、親疎平等利益の必要を説く法話の面白さは、忽ち多くの信者を作つた。

幾年かの後には、そこへ立派な堂が出来、更に幾年かの後には、そこへ立派な寺院が建つた。

浅右衛門坊が、百歳に近い長壽を保つて遷化した時には、その寺院を中心にして、賑かな町さへ出来てゐたといふことである。

長野縣西塞摩郡××村の××寺がそれだといふことであるが、僅

な古文書と、木曾福島に住んでゐた頃、土地の古老から聞いた話とを材料にして綴つたこの物語へ、然ういふ適確の寺院名を擧げることは危険だと思ふ。

作者の云ひたいことは、一夜の出来事から一人の男の悟をひらきその悟から變地ともいふべき山奥へ、立派な寺院が出来賑かな町が出来たといふことだけである。(了)

## 笑話

がうつかり飛出した。

『あいよ！』

## 習慣恐るべし

## 戀物語

リチードは大變な失敗をやつた。と云ふのは馬鹿に良く氣のつく女と結婚したのだが、あんまり世話を焼き過ぎるのでうろさくなつて、遂々海軍に仕願して仕舞つた。檢閲の時であつた。艦長が彼の前に立止まつた。

『上着のボタンを掛けろ！』

ところが可哀そうにリチードは、幾度も女房に同じことを云はれてゐたので、その時の返事は

一人の大きな、ぶく／＼した、醜い殿様が、ある美しい姫君に戀をしました。そして姫君に申されました。

『そなたは余を戀するやうになれるであらうか』  
すると姫君は即座に御返事申しました。

『それは大丈夫で御座いますわ。もう私は貴方様を見ても笑はなくなりましたもの』

×

芝居界の狂言囃子



# 宗教因芝居色彩

狸亭庵主人

## 上篇

宗教を材料とした芝居に就て、特に調べると面白いことも色々あるに相違ないが、今は簡単に「宗教に因む芝居」その他それに関与した種々な芝居の中から名あるもの丈を拾ひ集めて紹介して見よう。

### (一) 宗教劇

宗教に縁の深い宗教劇として獨立された作品はさう澤山ある

ものではない。先づ數へ擧げて見ると、「肉附面」(眞宗) 蓮如上人を取材したもの、香川騷動「當鐵鉢報 鬼」(眞宗) 弘法大師、「荊萱桑門筑紫轢」の荊萱上人、「那智瀧祈誓文覺」の文覺上人、「二月堂」の良辨僧正、「頼家阿闍梨」の三井寺實相坊、弘法大師(故雁次郎主演) 歌舞伎十八番の内「不動」の不動明王、「親鸞上人」など、新しい處では、弘法大師千百年遠忌紀念を祝す爲、特に吉田絃二郎氏が書卸した大物「沙門空海」(歌右衛門主演) が昭和九年三月歌舞伎座で上演、これ等は獨立された宗教劇で有名なものである。他宗の物を取扱つたのでは、切支丹劇の中

で「南蠻寺門前」「切支丹信長」岡本綺堂氏作「切支丹屋敷」徳川時代に於て最も厳しかつた禁制の切支丹をめぐる一挿話、宣教師ヨハン(左團次主演)を中心として、同教徒の遊女朝妻が一枚加はつた色模様のある悲劇、緋縮緬の長襦袢で櫻の木にくくりつけられた彼女、日も入相となつて本釣鐘を打込むと、櫻がヒラ／＼と淋しく散ると共に、掟に叛いた咎で、女の生命が亡くなるといふ哀れな情景は、まだハツキリ目に残つて居る。

外に早川雪洲が關屋敏子、山田耕稼まで引張り込んで、昭和十年の忙しき十二月、日本劇場を借り切つて、雪洲謹作、自演の釋尊劇を、日本佛教協會の手で公會をやつた。

## (二) 由 來 劇

由來を取扱はれた劇では、「世界一富士靈驗」で、教祖角行が狂人を治す場があり、富士講行者の元祖「初開場梅田神垣」井上正鐵傳、神道教祖の雨乞ひ「晴行空浪宇和島」和靈神社の由來、山家清兵衛

の一件「根津神社忠臣鑑」根津宇右衛門の根津神社の由來、「立寺鐘綱由來」四國八十八ヶ所靈驗記。讃岐國立行寺の利生記。歌舞伎十八番の内「蛇柳」は弘法大師の蛇柳の由來を主とせるものであつて、前者は上方で大分以前上演されたが、後者は近頃では一向上演されない芝居である。

## (三) 僧を主役の劇

此の種の芝居は随分澤山ある。その中でも皆様がよくお芝居で御覧になるものだけを選んで、左に掲げて見ると、此んなものがある。

第一に、歌舞伎十八番の内「勸進帳」を挙げたい。義經奥州落ちの際、武藏坊辨慶を先

達となつて、義經主従が山伏姿で、詮議いと

厳しき安宅の關を通り抜けやうとする時、關

守富樫左衛門に咎められる、早速辨慶の機智

よろしきを得て、例の「勸進帳」の一卷を取り

り出して聲高かに讀み上げて、押問答の末、

富樫の情によつて、此處を無事に落ち延び

る。辨慶の幕外花道の六法は歌舞伎劇の最高の氣品を示すものである。

此の劇は辨慶の一人舞臺で、主君思ひの情

合が實に巧みに描寫されてゐる。

昔九代目市川團十郎は特に「勸進帳」の辨

慶に優れてゐて、當り藝の中でも最上のも

だと言はれてゐると古老から聞く。

特筆すべきは、明治二十年四月廿六日から

四日に亘り麻布烏居坂井上侯爵邸で催され、

畏くも明治天皇、皇后、皇太后三陛下の天覽

演劇に、此の劇を上演したことは、團十郎の

みの光景にとどまらず、日本演劇史の光彩あ

る一頁を飾るものである。

他に「船辨慶」「御所櫻堀川夜討」では辨慶

上使の件がある。

「牡丹平家譚」「清盛を亡ぼさん陰謀が起

り、西光法師もその一人に加はり、未前に事

破れて清盛に知れ捕へられて、目前で種々と

訊問されるが、白狀せぬのみか、清盛を罵る

ので、西光は刑に行はれる。

「平家女護島」「法勝寺の僧俊寛僧都、平判官

康頼、丹波少將成経の三人は、平家を亡ぼす企てが不成功に終り、清盛の怒にふれて、鬼界ヶ島に流刑が茲幾年、地獄の悲しみ苦しみを味はつてゐたが、計らず都より使者瀬尾が現はれて、二人は赦免されたが、俊寛だけは残されたので、島の鬼となると罵る。船は島を離れるので、崖上に登つて皆の行方を淋しくいつ迄も見送る。

歌舞伎十八番の内「鳴神」では鳴神上人は、我が願ひが叶はぬのを怒つて、世界中の龍神を渾身へ封じ込めた。官女雲の絶間は、自らその峻山に登つて、色仕掛で鳴神をたらし、鳴神が寝た際に注連を切つて逃げる。大雨が降つて来る、鳴神は怒つて絶間の後を追ひかける。

「法懸松成田利剣」は果物語で、祐念上人（所謂祐天上人のこと）が果の亡霊を解脱したものである。

あとは、一束にたばねて紹介する。

故坪内博士「名残の星月夜」の北條の計略に落ちた公曉禪師が鎌倉鶴ヶ岡八幡宮に實朝

が參詣の折、殺して館へ歸つて来ると、北條方の追手が来て公曉を殺す。「信長行狀記」の西光法師「高時」の館で天狗の舞の北條相模守高時「高野義人」の悪僧良道、悪僧道、「尼將軍」の平政子、「二月堂」の良辨僧正、「鞍馬山」の牛若丸に劍法を傳授する天狗の頭僧正坊「薩摩瀧波間月影」西郷隆盛と身を投げた月照上人「たるま」の達磨大師等が知られて居る。

#### (四) 武士の出家

武士が世の無常を感じて、弓矢を捨て、僧になつた劇では、

「橋供養梵字文覺」遠藤盛遠は、渡邊豆の美妻袈裟御前に横戀慕し、或る夜豆の寢所へ忍び入つて、戀敵豆と信じて夫の身替りの袈裟の首を切り、それを知つて驚愕したが早や遅し、やがて無常を感じて盛遠は剃髪し、文覺と改めて出家道へ入る。他に「那智龍祈誓文覺」那智山に引籠り龍の荒行の件で、不動明王の出現がある。

「一谷鐵軍記」陣屋の段、熊谷次郎直實は、平教盛の身代りにいとしの我が子小次郎を討つてより、無常を悟つて、髪を剃つて衣姿となつてから、

「十六年は一昔……」と云ふて、青くなつた頭をなげ、義經に暇乞ひして後諸國へ巡禮する。熊谷が坊主となつてからの劇には「蓮生坊物語」がある。

外に岡本綺堂氏作「佐々木高綱」(松蔭戯曲十種の内)では、石橋山敗戦の時、高綱は頼朝の身代りになつて危難を救ひ、日本の半分の恩賞に貰ふ約束だったが、頼朝が大將軍になつても何の沙汰さへ無いので絶えぬ不平を破つて居た。

中村辨康著

四六版八〇頁  
九ボ總ふり假名

信仰讀本

定價 二十二錢  
送料共

邪教に對して正しい信仰の把握を以つて對抗せよ！本書こそ簡にして要を得たる求道人のための案内書である。

一 頁  
講 談

## 本 多 の 釜 碎 き



徳川家康の家臣本多作左衛門と云ふ人は面貌魁偉、この人の顔を見せると子供が泣き出すと云ふ位ゐな醜男で御座いました、至つて剛直勇敢、数度の合戦に手柄を立てて永祿八年三河全州が徳川氏

の治領となりました時に、三奉行の一人に取立てられた程の豪傑。東照宮未だ濱松御在城の砌、駿府へ御討入遊され御歸陣の折、阿部川の東河原にさしかゝると、そこに人を煮る釜が御座いました。

人々を煮る釜と云ひましても、それで人間の佃煮をこしらへて饅頭にして賣出さうと云ふ譯ではない、重い罪人をこれに入れて煮殺しの死刑にする云ふ。石川五右衛門と縁の深い釜。これを東照宮様が御覽にな

つて、これを濱松まで持ちかへれと云ふ御命令そこで兵卒共にこれを擦がせて濱松へ上ることゝ相成りました。そこへ通り合せたのが、本多作左衛門重次、  
「こりや、貴殿等は此の釜を擔がせていくくへ持つて参らるゝ佃煮屋の内職でも始めるのか」  
「元談いつちや困る。これは御様の御命令、濱松へ持つて参り、重罪人をこれで煮殺すので御座る。」  
これを聞くと本多は眞赤になつて腹を立てた。

「なんと云はるゝ。これにて罪人を釜うでにいたさるゝとな。もつての外の御所存かな。名君は人を殺さず。まして天下を望まると我が君が家臣はもとより、下人民にいたるまで、釜うでにさるゝやうな罪を犯させるやうでは天下を掌握するなど思ひもよらぬ。民は憐れまざるべからず。その御心掛がうらめしい。」  
と今度ははら／＼と落涙いたし「拙者が責任を負ふから、この釜をこの場で打ち砕くがよい。そして、いま作左衛門が申したことをつぶさに主君に言上いたせ。萬一お怒りに相成らば拙者が立派に腹を切つておわび致す。」  
と云つてどうしてもきゝません。そこで御下命を受けたものも仕方なく御座いませぬので、その場に釜を打砕きまして、濱松へ歸ると早速委細を家康公に言上いたしました。東照宮はら／＼と御落涙遊ばされて、作左衛門を呼んで参れとの御言葉。作左衛門お召によつて御前へ参上いたしますと、殿は本多のお手をおとりになつて、作左、予が誤つておつたぞ、ゆるせよとの仰せ。流石剛氣の本多も、この御一言に思はず涙を流したと云ふ、本多釜くだきの一席。



童話

最初の酒つくりの話

奥 榮 一作  
鈴木 金 平 畫

昔、まだ酒といふものがこの世になかった頃は悪人といふものが、今程、澤山ありませんでした。そのために、地獄は大變ひまで、鬼どもは、たいくつきつて、毎日あくびばかりしてゐました。

で、鬼の大將は、これではいかぬと思ひまして、閻魔大王に申上げ、鬼の家族どもを、現世へ派遣して、悪人を作らせることにしました。

さういふ事があつてから、間もない時の事であります。

或夏の暑い日に、一人の百姓が、せつせと畑を耕してゐました。

やがて、百姓は、汗と土埃で眞黒になつた顔を上げて、チラツと、照りつけてゐる太陽を見上げながら云ひました。

『おう、もう午だ。どうれ、もう一畦起したら、それで、お辨當を食べる事にしやう』

所が、この時、畑の近くにある藪の中に、一匹の小鬼が匿れて、最前から、この百姓の様子を、ちつと眺めてゐました。

『ちえつ、何てえ辛棒強い男だらう。俺は地獄の大王の云付けで此世へ悪人を拵へに來たのだが、この百姓のやうに辛棒強くつては、やりきれない。ようし、あの木の枝にかゝつてゐる彼男の辨當を取つてやらう、さうしたら腹を立てゝ仕事をしなくなるかも知れない』

小鬼は、かう云ひますと、びよこんと飛び出して行つて、折角、百姓が楽しみにしてゐるお午の辨當を取つてしまひました。

まもなく、百姓は仕事を終つて、辨當の包を懸けて置いた木蔭の處へやつて來ました。

『あゝ、腹がへつた、どうれ』

と、云つて、辨當の包を取らうとしましたが、小鬼が盗んでしまつたので、そこいらにあらう道理がありません。

『おかしいな、誰も來ないのに辨當が失くなつてゐる。鳥でも啄いたのなら入物位はありさうなものだが、矢張、誰かど持つて行つたのだな、よく／＼餓じかつたに違ひない。仕方

がないわ、俺は一度位食へなくつたつて飢え死にもすまい。さあ、一休みして、仕事をする事にしやう』

百姓は辨當の事をすつかり諦めて、木の蔭で一休みすると、またせつせと仕事を始めました。

藪の中で、これを見てゐた小鬼は忌々しさに呟きました。『何だ、また仕事をはじめやがつたな、仕様のない男だ、これぢやあ仲々地獄へは連れて行けない、困つたなあ』と、云ひながら地面の中へ消えて行きました。

扱、話はかはりまして、こゝは地獄の閻魔大王の役所です。正面の一段高い處に、閻魔大王が控へて、その兩側に鬼の役人が帳面を開いて座つてゐます。さうして、その前の低い處に、七八匹の小鬼がきちんと、かしこまつて居りました。

閻魔大王は大きな笏を持ち直して、エヘンと咳拂をして『よし、それで、大體、今日の鬼どもの報告は済んだのだな』と、申しました。

その日は丁度、地獄から悪人を拵へるために現世へ派遣した鬼どもが報告を持つて來る日だつたのです。

すると、傍にゐた鬼の役人が恭しく一禮をして、帳面を見

ながら、

『へえ、大體すみましてござ  
います。一寸読み上げますと、

役人係の鬼が生捕つたのが

八百三十六人、商人係が九千

五百四十三人、軍人係が一千

とんで十七人、それから婦人

係のも只今受取りましたが、

これは仲々上成績でござりま

して、女房が八萬六千三百十

九人、娘が三萬七千四百三十

八人でございます。残つてゐ

るのは百姓係が一人でござい

ますが、もう、おつつけ見え

る事と存じますので、へい』

と、鬼の役人が申しました。

やがて、待つ程もなく、百

姓係の鬼が辨當の包を持つて

やつて來ました。

『おい百姓係、先程から大王



様は御待ち兼ねだ。お前は何

百人程、百姓を生捕つた、早

く申上げろ』

と、鬼の役人が申しました。

『へえ、手前は未だ一人も、

どうも百姓と云ふ奴は、どれ

もこれも善人ばかりで……』

と、百姓係の小鬼が云ひか

けた途端に、

『黙れ』

大王は眞赤になつて、怒鳴

りつけました。

『十日もかゝつて、一人もと

は何んぢや、それで鬼たる資

格があると思ふか、一體、現世

へ行つて何をしてゐたのぢ

や』

『申譯ありません。仰せの通

り悪人を拵へやうと思つて、

いろ／＼な事をやつて見まし

た。最後には、御覽の通り一番貧乏さうな百姓の辨當を取り上げて、焼糞を起させてやらうとしたのですが、そ奴は誠に人の良い諦のいゝ人間で……」

『えい、またしても、白痴な事を、人の良い男の話は、地獄では禁物だと云ふ事を心得ぬか、おい、ものども、他の者の見せしめだや、鞭でこいつを引つばたけ』

大王の命令で、百姓係の小鬼は他の鬼どもに掴へられて、ビュ／＼虎の皮の當つたお尻をひつばたかれました。

で、その小鬼はわん／＼泣き出しましたが、大王は

『もつと打て、巧い考へが出るまで、いくらでも打て』

と、小鬼どもに命令しました。

そこで、百姓係の小鬼は溜らなくなつて、

『考へつきました、考へつきました。百姓どもを悪人にする

とてもいい考へがつけました』と、叫びました。

『よし、どんな考へがついたか言つて見ろ』

『今度こそ、百姓どもを、皆んな、地獄へ引張つて來るとて

も巧い考へがつけました。どうぞ、私に三年の暇を下さいまし、

さうしたら、私はあの男の作男に化け込んで、巧い工合に種

を播きます』

『間違ひはあるまいな』

『大丈夫でございます』

『よし、許してやれ、その代り三年たつて、百姓どもを悪人に出来なかつたら、そのお前の角をもぎとり、その上に虎の皮の褌を取上げて、地獄を追放するからさう思へ』

と、大王は厳しい申渡しをした上で、百姓係の小鬼をやつと赦してやりました。

それから三年の月日が経ちました。百姓係の小鬼が地獄の大王に約束したその三年目の事です。

小鬼は始めの目算通り、いつか辨當を盗んでやつた貧しい百姓の家に、あれからづうと引續いて作男に化けて、住み込んでゐたのでした。

主人の百姓が並々ならぬ働き手の處へ、作男に化けた小鬼が、夜の目も寝ない程に、骨身を惜しまず働きましたので、その百姓は一年毎に收穫を増して行つて、今年は穀倉に米が入り切れぬ程、豊かな身代になりました。

或日の事です。作男の小鬼は主人の百姓に云ひました。

『旦那、こりやとても、穀倉へ入りきれませんね』

『うむ、まあ入るだけ入れて、あとは近處の困つてゐる人達が貸して呉れつて云つて來てゐるから、そつちへ廻してやら

う』

『旦那、そいつあ、いけませんぜ、物を貸すのは山の下へ物を投げるやうなもので、貸を集めるのは山の上へ引上げるやうなものだ、ところ年寄は云ひますからね』

『心配するな、米はこの通り餘るほどあるんだから』

『ちやあ、旦那、こうなすつてはどうです、私がこの餘分な米で旦那が生涯樂しみなさるやうなものを拵へて上げませう』

『ほう、生涯樂しめるものだつて、何だいそれは』

『飲み物ですよ、その飲み物は、力が無い時には力が殖えて来るし、腹が減つた時には、腹がくちくなるし、寝られない時には直ぐ眠くなるし、氣がふさぐ時には浮きく／＼して来るし、氣が臆した時には勇氣が出て来る、とまアかういふ飲み物なんでさアね』

やがて、暫くしますと、小鬼は、その不思議な飲物、酒と云ふものを作り上げました。

『どうです旦那、一つ匂ひを嗅いで御覽なさい』

『ほう、えらい香りの強いもんぢやなア』

百姓は飲みたさうに鼻をびく／＼させました。

『さあ、一口ぐつと、飲んでご覽なさい』

小鬼のすゝめる酒を百姓は、初めはちびり／＼飲んでゐた

が、その中、ぐつと一息に飲みほして、

『こりやい、何だか舌の先から始まつて、手、足と、こう身體中が若返つてくるやうな氣がする。一つ嫌と悴達を呼んで飲ましてやらう』

と、主婦さんや息子達を呼びにやりました。

とう／＼家内中が、酒を飲んで、大浮れに浮れて、踊るやら、歌ふやら大騒ぎになりました。

と、この騒ぎをきゝつけて日頃喧しやの信心深いお祖父さんがやつて來ました。

『何んぢや、お前たちは氣でも違つたのか、外の人みんな働いてゐるのに、眞晝間、踊つたり歌つたり』

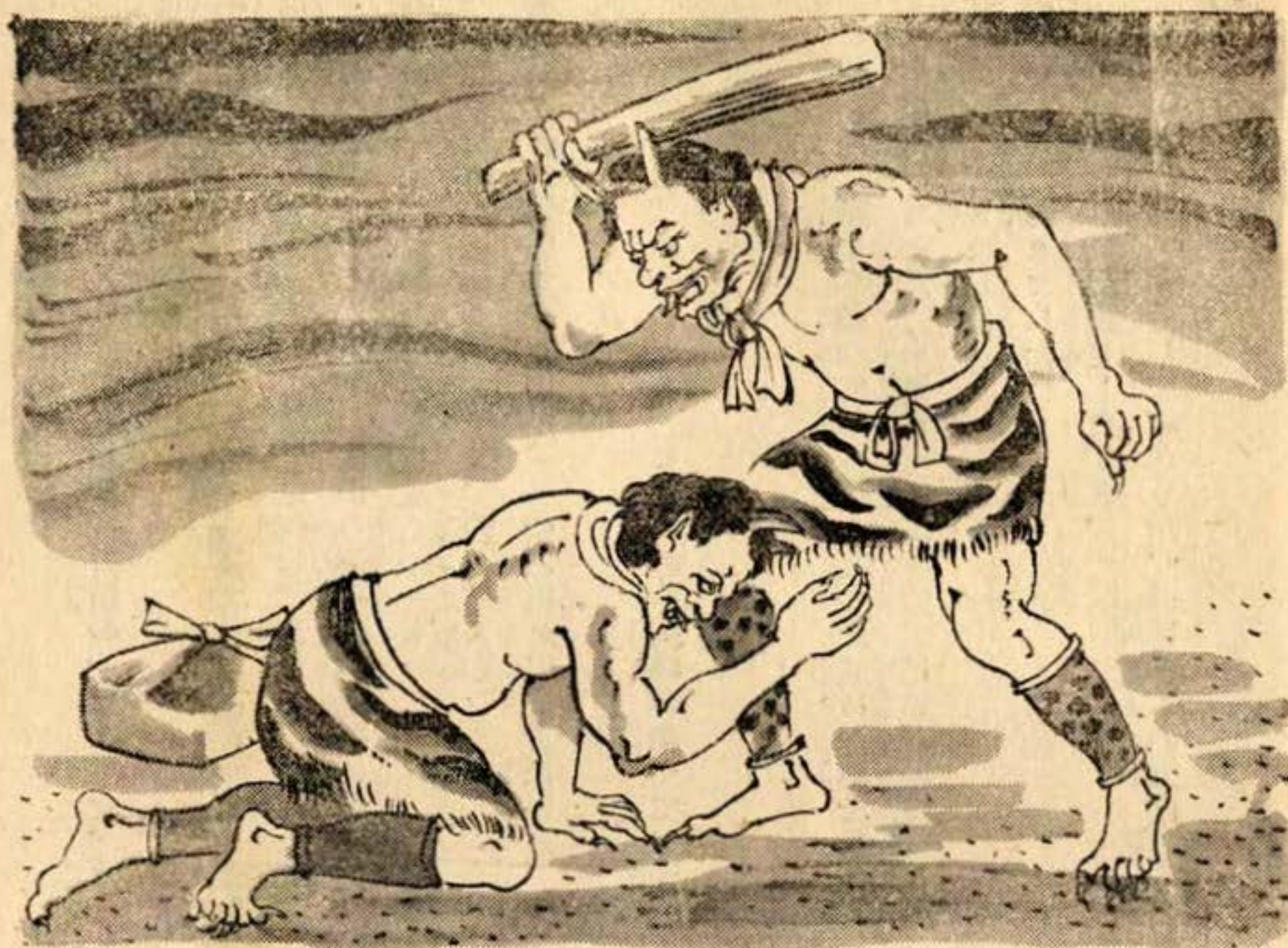
お祖父さんは大聲に息子達を叱りましたが、そんな小言が浮れきつてゐる息子達の耳に入らう道理はありません。

お祖父さんは、もうがまんが出来なくなつたと見えて、酒の容器に近づいて、いきなり酒を地面へあけてしまいました。

すると、百姓は眞赤になつて、お祖父さんに飛びかゝつて『やい、何をするんだ、この老碌爺め、こんな結構なものを、

みんなこぼしてしまひやがつて』

と、お祖父さんをつき飛ばしてしまひました。



それから、また暫くたつて後の事です。

百姓は、また、小鬼の新しく作った酒を持出して、今度は村中の喧しやの年寄どもを集めて、酒盛をして居りました。

『さあ、どしん／＼やつて下さい』

百姓が老人達にすゝめました。

『成程、こいつあ素晴らしい』

『おや、身體がほか／＼して来たぞ』

『まつたく、こんな結構ものはねえな』

老人達は口々に申しました。

『で、お前さん達に来て貰つたのは、外でもない、うちの祖父さんの事ですがね』百姓は話し出しました。

『知つての通り、私は今ではかうして、祖父さんをずつと養つてゐる身分だ。それにも拘らず、お祖父さんは私が酒を飲

むと云つて、口喧しく云ふので、毎日家の中に喧嘩が、絶えない、そこで、一層のこと、あの山の中にでも小屋を建て、

御祖父さんに行つて貰うかと思つてね』

『ふむ、成程、若い時から親孝行で評判のお前さんが、さう

云ふからには、よく／＼の事だ』

酔つぱらつた老人の一人が云ふと、他の一人も

『さうとも、さうとも、お前の親孝行な事は俺が一番知つて

ゐる』と、呑込み顔で云ひました。

すると、また別な一人が、そのゆで蛸のやうな顔を、ぐつとその老人の方へ向けて、

『何だ、お前が一番知つてゐる。馬鹿をこけ』『何を生意氣な、ぶん擲るぞ』『擲つて見ろ』『何を、畜生』

二人の老人は、ふらくししながら掴み合ひを初めました。

『まあ、そんなに掴み合ひをしなくつとも』

百姓が驚いて止めやうとすと、別の老人が

『おい、酒がないぢやないか、もつと出せ、出さないと、俺も暴れるぞ』

そんな風に、あつちにも、こつちにも喧嘩が起つて、大變な騒ぎになりました。

こうした、騒ぎがあつてから暫くたつた或日の事でした。

作男に化けてゐた、小鬼が三年ぶりで、地獄の閻魔大王の役所へ歸つて來ました。

『へい、只今歸りました』

小鬼が大王にお辭儀をしますと、

大王は威めしい顔をして、『どうだ、百姓どもの方は巧く行つたか』

『へえ、そりやもう、巧く行つたの行かないのつて、私が一寸細工をした加減で、あの律義な百姓どもが、喧嘩はする。仕事は懶ける。嘘はつく、他人のものは搔拂ふ、中には人殺しをする者もあると云ふ工合で、今に地獄が満員になるのではないかと、實は内々心配してゐる位で』

小鬼はさも芯から心配さうな顔をしました。

『よし、よし、心配するな。ところで、貴様のその抜勤の功勞に免じて、特別に位を上げてやらう。さうだな、針の山の亡者係主任にしてやらう。それから今迄、貴様にはまだ許してゐなかつた鐵の棒をとらせるから、せいぜい亡者どもをいぢめ抜くんだぞ』

と、大王の仰せに小鬼は大變に悦びました。

それ以來この世ながらの地獄には亡者どもが澤山ふえて夜となく晝となく鬼どもの呵責をうける事になつたと云ふことであります。

ことはむかしむかし外國の話ですが、惡魔どものさまたまに惡智恵をしぼつた惡だくらみでいい人をたぶらかすのは、いつの時どこの國でも變りはありません。

皆さんお互によく氣をつけて、鬼どもの手にのせられてせめ苦をうけないやうにはありませんか。



# 一頁落語

## 親でいろ

「節約にもよりけりですよ。怪我でもさせたらどうするの。」

「ちえッ、つまんねえな。切角僕が親切に切つてやらうつて云ふのに。」

「なんです。その口の利きやうは、何處でならつたんです。ちえッ、つまんねえ、なんて下等な言葉を使ふと大きくなつて碌なものにはなれませんか。」

「お父さん位ひにはなるでしヨ。」

「なんですつて、もう一邊言つて御覽なさい。」

「だつて、お父さんが、この間さう云つたよ。お母さんに小使くれつて云つたら、體目ですよつて云はれて、ちえッ、つまんねえな。」

「でも、お母さんしよつちい節約々々と云つてゐるぢやないか。」

「そんな、くだらない眞似はしな

くつてもいいんです。……全く子供には油斷が出来ない。お父さん！一寸おいで下さい。」

「うるさいな、今勉強中だ子供。喧嘩位自分で仕末したら良いぢやないか。」

「それがいけないのですよ。貴方が餘計なことをおつしやるから子供が眞似をして困るじやありませんか。」

「おかあちゃん！お兄ちゃんがまた頭の毛のひつばつた。」

「おにいさん！何故さう云ふことを聞かないのです。いま叱言を云つたばかりぢやありませんか。」

「ちがふよ。お母さんが頭を切つちやいけないつて云ふから、さつき切つた毛を延ばさうと思つて引張つたんだよ。」

「あなた！どうして家の子はから云ふことをきかないんでせう。誰れかうちの子供等を預つてくれる人はいないか知ら。」

お母さん悲鳴をあげてゐます。さうだな。さううるさくいふのなら、會社の中村君の奥さんが子供がほしい／＼つて云つてゐるから、あそこへ預けても良いな。……ちや今から直ぐ連れて行かう。直ぐ仕度をさせなさい。」

「あなた！何を云ふんです。うちの小供を中村さんに遣らうとおつしやるんですか。あなた、うちの可愛い、……。」

「おい／＼、さう泣き聲を出して怒らなくても良いよ。お前、今誰れか預つて呉れる人はいないかつて云ふからさ。それなら中村さんが丁度良いだらう。」

「まあ、貴方と云ふ人は情ない、私の冗談の嘘を本當になすつて、うちの小供を人様に……。」

と今度はお母さんが泣き出す。云ふ騒ぎ、これを聞いてゐた小供達、お母さん、子供の前で嘘をついてはいけませんよ。」

お母さん、子供の前で嘘をついてはいけませんよ。」

お母さん、子供の前で嘘をついてはいけませんよ。」

お母さん、子供の前で嘘をついてはいけませんよ。」

## 筆 隨

## 傘

傘は冬よりは春から夏へかけての景物である。それも長雨ばかり續いてゐる季節になると、つい傘について色々な事が思ひ浮べられる。人間の使ふ道具の中で傘ほどに無くては濟まされぬものであり乍ら厄介な、そして季節季節の表情や、それを使ふ人の性格を克明に現はすものは少ない。

春雨、五月雨、梅雨、夕立と季節季節で傘が現はす自然の表情は違ふ。浅緑の芽が吹き出した柳の枝の、なよやかに動いてゐる橋のたもとを、降るといふ程でもなく煙る雨の表情は、蛇の目でなくては現はせない——そんな景色は、「夜目、遠目、傘のうち」といふ位だから、無論ロマンチズムである。その

## 佐々三々雄

朦朧、繊細、優雅に比べると、五月雨のからつと上つた日の眞晝時、無雑作に乾してある傘は、番傘がよく、それも何か屋敷か店の商標でも大きな字で書いたのなら一層よく、更に慾を言ふなら、背景に白壁の土蔵か何かあらと好い。荒けづりで、明晰なのがその時の表情である。

そんな事が限りなく思ひ出されてくる。

人間は「道具を使ふ」存在であると言はれる。然しこの歐洲風の言ひ方は、私共日本人が道具に對する場合とは大變に違つてゐる。日本人が道具を使ふ事に於いて、他の民族と變りの爲い事は言ふまでもないし、その使ひ

方も歐洲人のやうに不器用ではなく、はるかに巧みに使ひこなしてさへゐることも言ふまでもない事であるが、道具に對する態度は大變に違つてゐる。

歐洲風の考へ方によると、人間が道具を工夫したのは、道具によつて自然を征服する爲であつた。刀、弓、矢の發明は、刀の力だけ人間の力が大きくなり、弓や矢の考案は、人間の手の長さが弓や矢の届く距離だけ延びたことであつた。自然を征服し、人間の安全を計つて、それだけ幸福と快樂とを増大することであつた。人間と自然とは道具によつて敵對的な關係に立つてゐる。だが、私共の道具に對する感情は違ふ。寧ろそのものを通して自然と親しみ自然と融け合ふのである。道具は自然を打碎くハンマーではなくて、單に「身の廻りのもので」ある。

私共の家屋は、歐洲人の家屋のやうに、厚い壁で暑さや寒さを防ぐ爲に自然と絶縁して小さな世界を作る要もない。大きく切り開いた窓から、ずつと突き出た縁側の板敷から、

そのまゝ、自然に連續する。自由自在に座敷の中に空や木や池を引きずり込むのが、私共の家である。

傘にしたところで、英語流の表現によれば「傘が雨から吾々を防ぐ」のであるけれども、私共の使ふ傘は却つて雨に濡れる爲の道具である。傘を通して、雨がしつとりと「人生」の中に染み込んでくるのである。

それだけ厄介な代物であるだけに、誰でも傘については悩まされることが多いに違ひない。降ると見込みをつけて持つて出たのが、かんかん日照りになつて、抱へて歩く格好の悪さ、第一天氣の日の傘位邪魔になるものはない。然し出る時の日本晴れが夕方からどしや降りになつて、仕方なしに借りてきた傘の、始末がまた一通りではない。

或る夏、N温泉に居たことがあるが、あそこは一時間も散歩をしてゐる間に、思ひがけぬ俄雨に何度も出遭ふことがあつて、向ふの山に「雨が來たな」と見ると、その駆けてく

る姿がはつきり見えて、サツと驟雨が來るといふ所であつたが、方々に町の處女會が青年會の傘を借してくる所があつて、降り出したら借りて、止んだら歩いてゐるうちに別の所で返へせばよいといふ制度になつてゐたので、氣輕に借りられたことがあつた。

少學生の頃、何年生の時であつたか、修身の讀本でこんな話を教はつたことがある——「熱生を多數養成してゐる或る熱の學僕が、『あの生徒は屹度成功します』とか、『あれは駄目です』とか屢々豫言をした。それが長い間に必ず適中するので、不思議に思つて、教師でもないのにどうしてそんな事が判るのか、と或る人が尋ねたところが、その學僕の答は簡單であつた。『俄雨の折、傘を借してやつて、ちゃんと返へしに來た生徒は必ず成功します』。かうなると傘を借りるといふ些細な事が人の一生を支配することになる。そこに性格が如實に反映されることになる。

ところが、これとは一寸反對の意味にもとれる話を聞いた——會社や官廳には必

ず一人や二人は「パロメーター」がゐて、その人が傘を持つてきた日なら、如何に晴れてゐても定つて午後からは降りになる、もし雲が低く垂れてゐてもこの晴雨計が傘を持參してこなければ、午後からは晴れる。然しかういふ人は、大方は、役所の生き字引きと言はれる程の勤勉、精勵の型の人であるが、青雲の志を抱いて一躍大を爲す程の型の人ではないのださうである。照らうが降らうが傘などに拘らないに限るといふ意味にもとれる。かうなると愈々厄介である。ハムレットを眞似るのではないが「持つて出ようか、出まひか、それが問題だ」と言ひたくなる。

### あととは知らない

男「僕等の結婚、案外簡單に出來ると思ひますよ。」

僕の親爺は牧師ですからね。娘「では兎に角結婚して見ませうか。……妾のお父さん辯護士ですけど。」

# 信 仰 相 談

## 擔 當 中 村 辨 康

本欄への投書は、ハガキ、または封書にて、住所氏名御明記の上、信仰相談係あてに送ること、紙上匿名は可。

### 念佛廻向

(問) 念佛の功德を極樂に回向するものでしやうか。若し功德を極樂に回向すると、現世の自分の手元が何んだか淋しいやうな氣がします。(福岡 中村正一郎)

(答) あなたの申す念佛に何か功德がハツキリ意識に上りましたか。發願回向の義と云ふのは「南無」と云ふ言葉の内容だと、善導大師が説明せられたものです。即ち發願とは阿彌陀佛の世界に生きんとする願ひを發することであり、回向とはその事を中心を向けることです。元と元と私達には功德なんて氣のきいたものは有りもしないのに、何

うして淋しい氣が起りませう。よく貴君の生活事實を考へて見て下さい。若しあなたの生活が念佛に依て生れ更つたやうに、よくなつたら、其時功德の回向に就て、自然に御理解が出来る筈であります。然し今の問題は功德の回向ではありません。

### 信仰で病氣が治るか

(問) 後生迄も助けて下さる御力の持主のミ佛なら人間が現に病氣で苦しんでゐる時なせ助けて下さらないのでせう。一生懸命に病床に伏し乍らお念佛申して少しもなほりません。それなのに近所の知人で天理教に祈つたら醫者から見はなされた程の大病人が、藥石も用

ひずして見事に數日にして全快しました。私はミ佛をうたがひたくなります。後生云々の御親切もあやしむ様になりました。天理教の神様が阿彌陀如來様より有難く尊い様に思はれるやうになりました。天理教の神様と阿彌陀如來とほんとにどちら様が尊いのでせう。この迷へる私にわからないお念佛が進められる様にお説き下さいませ。(大阪 北島道秋)

(答) 此欄では少し無理ですが一應申し上げて見ませう。我國に於ける宗教信仰には色々なものがあつて、宗教のデパートだと云ふ批評もある位ですが、幕末から明治時代に起つたものは、大體神祕主義的な形を取つて居ります。現代の新興宗教も亦た神祕主義的傾向を持つて居ります。何時の世でも、人心が不安で動搖をして居る時は、物質

窮乏の充足といふ事が重要な要素になつて、新しい宗教が、雨後の筍のやうに出るもので、どれも之も似たものですが、其中で一番勢力のあるものが残存されて行きます。さうして道徳的な要素、高等な宗教的理論があとから添加され彩色されて行きますから、段々外見は立派のやうに見えて來ますが、事實は病氣を癒すとか、御金もうるとか云ふ事が、依然として大衆の目標になつて居ります。宗派神道の大部分、佛教の中での御祈禱宗派などは皆なそれです。然し考へて下さい。大概の人は皆な病氣で死ぬのです。其宗教の教祖派祖と云ふやうな病氣を直す本家本元の人達でも、皆な病氣して死んだのです。大體生物の壽命の長さは其成熟期の五倍が原則となつて居ります。

# 信 仰 相 談

から、病氣さへ直れば人間は百二十五乃至百四十歳まで生きられてよい筈で、現在でも百歳以上の老人が數へる程しか無いにしろ生きて居ります。然るに病氣治療の教祖や管長は幾つで死にましたかね。皆んな百歳以上だつたのでせうかも

今では餘りありませんが、一としきり催眠術療法と云ふことが大分流行つた事がありました。あれでかなり多數の人の病氣が直つたものです。御祈禱も催眠術の暗示法も心理的理論としては大體同じやうなものであります。

また神佛と云ふものは、天地綜合力と云ふか天地の大生命と云ふか、それに對する信仰的觀點の相違で、何とかの神とか、何何佛とか、名を異にして居るだけで、一體の異方面的觀察に過ぎないもので、その觀察が幼稚であるか何うかと云ふ相違はあつても、本體的に優劣のあるものではありません。之に反して若し人間がゴチヤゴチヤして居るやうに、神の國、佛の世界が何處かでイクツもゴチヤゴチヤして居るならば、神佛國際法でも制定しない限り、かなり混雜があるかも知れませんし、中には手當り次第に拜みたほす人もありますから、一々きいてやつたら神様佛様が鉢合せして麻胡付く場合がないとも云へません。そんな下らないものが宗教の神佛なのでせうか。そんな人間から神佛への差別待遇はおよしなさい。

更には拜んできいたから信ずる、きかないから止めると云ふやうな信仰なら、真摯のない薄情者であり、功利的な御都合主義であり、物をくれる人にだけオベツカをする輕薄な不人情者であつて、そんな人に御利益を與へるやうな神様なら、我儘な馬鹿檀那より劣つて居る事にもなりますから、神様の方で顔面を横にするでせう。然し、阿彌陀様だつて病氣位は直して下さいますよ。

法然上人は云つて居られます。「我等が惡業深重なるを滅して極樂に往生する程の大事をすら遂げさせ給ふ。況して此世に幾程ならぬ命をのべ病を助くる力ましますやらんや」と。

しきうでなければ、其時はその本家本元にも御祈禱がきかなかつたと見ても仕方がないでせう。またそれ等の信者は皆な長命長壽だつたのでせうか。それが證明し得るなら大變結構ですが、中には直るべき病氣も醫者にかからず御祈禱専門でやつた爲に死んでしまつたと云ふ例もかなり澤山ありますが、それは信仰が足りなかつたからだとは云へないで、夫も一步譲つて御尤もとして置きます。然しそれならば誰のでも直るとは云へないではありませんか。

一體人間の病氣は、病氣と云ふ字が示して居るやうに、氣を病む精神の苦悶が半分以上手傳つて居りますから、其精神苦悶がなくなるだけでも、半分以上病氣は直ります。況して御祈禱したから病氣は直ると暗示を受けて居る時は、御本人はスツカリ安心して直つたやうな氣になり、元氣も回復し、榮養の吸収もよくなつて漸次健康になるのは、寧ろ平凡な人間心理の然らしむる處であります。が、宗教的には神佛の御蔭と云つて云へない事もあります。

遇はにおよしなさい。更には拜んできいたから信ずる、きかないから止めると云ふやうな信仰なら、真摯のない薄情者であり、功利的な御都合主義であり、物をくれる人にだけオベツカをする輕薄な不人情者であつて、そんな人に御利益を與へるやうな神様なら、我儘な馬鹿檀那より劣つて居る事にもなりますから、神様の方で顔を横にするでせう。然し、阿彌陀様だつて病氣位は直して下さいますよ。

法然上人は云つて居られます。「我等が惡業深重なるを滅して極樂に往生する程の大事をすら遂げさせ給ふ。況して此世に幾程ならぬ命をのべ病を助くる力ましますやらんや」と。

ですが、それは世間の迷信的なものとは違ひます。即ち「宿

# 信 仰 相 談

業限りありて受くべからん病は如何なる諸々の神佛に祈るともそれに依るまじきなり。祈るに依りて病も止み命も伸る事あらば誰かは一人として病み死ぬ人あらん。然るに佛の御力は念佛を信する者をば轉重輕受して宿業限りありて重く受くべき病を輕く受けさせ給ふ。況んや非業を拂ひ給はん事ましまさざらんや」と。凡ては念佛一つに籠つて居ることをよく御諒解願ひます。大事な事ですから少し長く申し上げました。まだ云ひ足りませんが、大體之で御諒承願ひます。

## 三寶と稱名

(問) 木穗經に曰く「佛陀、達摩、僧迦と二十萬邊を稱すれば第三の夜摩天に生ず。若し能く一百萬邊を成滿すれば生死の流に背きて無上果を得」と

ありますが、はたして、阿彌陀佛を稱念すること二十萬すれば三寶稱念と同じく夜摩天上界に生ずるでしやうか。(福岡野村秀樹)

(答) 成程木穗子經にそんな事を云つて居ます。然し身心不亂無諸詔曲と云ふ條件を付けて居ますね。其上第三焰天に生ずるとか無上果を獲るとか云ふ事は、信仰の幼稚な波流離王に先づ木穗子で造つた珠數を持たせ、専心に三寶の名を稱へしめて佛敎に導き、初めの物質的欲求を精神的欲求に轉ぜしめた極めて巧妙な説法だつたのです。此經に云つて居る無上果とは羅漢即ち應供者と云つて社會の供養に應じ得る資格者のことであり、夜摩天即ち焰天は極く低い欲界の天ですが、時期を見ることの極めて上手な人達の事を云つたものです。時期

をよく見ることの出来る人は事業にも成功する人で結構ですが阿彌陀佛の淨土と云ふやうな眞實の佛の世界とは、到底比較にならないものです。

また之は數量に重きを置いて居るだけ、また幼稚な宗教ですから、密敎の先驅的經典かも知れません。然るに法然上人の念佛は多念をすゝめても數量には重きを置いて居ないので、茲をよくお間違へないやうに願ひます。

## 檀家總代の義務

(問) 亡父が在世中檀家總代の列に加はつて居りました關係上、その子として總代の列に加はることになりましたが、世情にもうとく、亦資力も家族の扶持に迫られて居りますので、どの程度の義務があるものか、貴欄を通して一般の義務事項を御

教示願ひたいと存じます。(東京 甚六生)

(答) 檀家總代は其寺の檀家を代表するもので、公文書などに連署を要する時、過半数の檀家總代が同意捺印すれば、其書類に國法的な効力が發生いたします。隨て其責任は主として寺院財産の保護等にあるもので、別に總代だからと云つて特別の經濟的義務がある譯ではありません。一般檀徒と同じ義務でよいのです。つまり身分に應じた協力で結構です。然し總代として檀家を代表して居るので、其責任上精神的には一般檀徒以上に其寺の興隆に盡されるのが至當と思ひます。

## 生木の塔婆

(問) 當地方の傳習として、十三回忌には「はねりの木」の枝つきの生木をけづつて塔婆を

# 信 仰 相 談

建てるのですが、三十三回忌には死者が生き返るとか生れかはるとか口傳へてをります。確かな典據があつての事かどうか不明です、又他郷にもこの習慣がありますかどうか、お知らせ願へれば幸ひです。(鳥取 専念寺支部)

(答) 今一般に五十回忌或はそれ以上の何百回忌も致しますが、禮綱本紀には庶民は三十三回忌までとしてありますから、元は夫れが回忌を營むことの最終だつたので、もう亡霊でないとして生木の塔婆を建てたものかとも思はれます。無論他地方でも其習慣があり、處に依て、五十回忌で、生木の塔婆を用ゐて居ます。一般にはよく櫛の生木を使ふやうですが、今では生木であれば何でも間に合せて居るらしく、段々都會化すに従つて思ふやうに

生木が得られないものですから、板塔婆になつて行くやうです。また塔婆の異名として功德樹、金剛樹、高顯樹などありますが、板若しくは木の塔婆から來たものかも知れません。

## 廣布薩とは

(問) 此の頃隣村のお寺で廣布薩と云ふものをつとめる貼紙を見ました。廣布薩とは如何なる法要でどんな功德がありますか。實はお参りしたと云ふ親戚の人に聞いても有難いむづかしい法要だとのみで分らず、檀那寺の和尚様もどんなことをやるのか知らぬといふので要領を得ませぬ。くはしく御教示を。

## (尾張 一信生)

(答) 布薩と云ふのは梵語で、支那では長養とか善宿とか淨住とか譯して居ります。之には出家の法と在家の法とあり

出家の法にまた普通の半月布薩式と廣布薩式とあります。原始的には半月半月にする。出家の布薩法と、毎月六齋日に八戒を持する在家の布薩法とで、淨きに居られしめる、善法を宿らしめる、善心を長養すると云ふ意味であります。此日は一同に會して、もし犯した罪があれば之を他に向つて懺悔し、更に戒律の文句を讀んで之を再認識し、今後の修養につとめるもので、或は「斷增長」とも云つて居ます。つまり惡を斷じ善を増長せしめると云ふ意味です。我國での始めは天平勝寶八年八月勅令を以て諸寺に勤めしめたと云ふ話です。

## 廣布薩と云ふのは浴齋、行

等、散華、梵唄、問答、說戒、呪願など色々面倒な事をする儀式であります。それは餘り繁瑣ですから、一般的には半月

布薩式と云ふのをやるやうです。

淨土宗などでは規則の上ではもう無くなつて居りまして、今ではやらなくてもよくなつて居ますが、大體、聖道門的な修養法でありまして、儀式其ものに功德を認めると云ふものとは意味の異なつて居る自己修養のもので、修養する人に取つては無論大きな功德がある譯です。

## 妻帯は破戒か

(問) 一枚起請文「この外に奥ふかきことを存せば二尊の」云々とありますが、三心四修や三部經のわけを知ることとは奥ふかき事のうちにはいるでせうか。また昔の僧侶は妻をもたず、今日の僧侶は妻帯をしてゐますが、なぜ昔のえらい僧は一人であつたのでせう。妻を娶ふことは悪いのですか。破戒になる

# 信 仰 相 談

のです。また法然上人や忍  
激上人はお一人で居られたの  
ですか。ある本に後裔だとか末  
派だとかありましたが、やはり  
お子様があつたのですか、光  
明大師などはどちらでせうか

(大阪 「信者」)

(答) 三心と四修とは信仰の内  
容と信仰の修養法とを云つたも  
のですし、三部經は淨土教の  
根本經典で、それを讀むことは  
五つの正しい行爲の一つとして  
許されて居るものです。

一枚起請文の「此外に奥深き  
事を存せば」と云はれてあるこ  
とは、念佛して救はれると云ふ  
こと以外に、秘義とか奥義とか  
の内密にしなければならぬもの  
は無いと云ふ事を誓つた言葉  
で、御尋ねのやうな意味の事を  
云つて居るのではありません。  
第二の妻帯が破戒か否かと云  
ふ事は、律僧のやうに戒律を嚴

守する事を誓約した人ならば、

無論妻帯は破戒の罪となりま

す。然し法然上人も云はれたや

うに、一般的には皆な無戒名字

比丘であつて、印度流、支那流

の持戒比丘ではないから、嚴密

な意味での破戒と云ふ譯にはな

りません。あの當時でも妻帯し

て居た人はありました。俊寛

僧都の話しにもありますやう

に、今の寺院に住む人達と同じ

やうな形式を取つて居た若干

の僧侶もあつたのです。有名な

聖覺法印なども代々の妻帯者

でした。然し徳川時代になつて、

法令で僧侶の妻帯を禁じました

から、一般に僧侶は獨身で居た

のです。

無論法然上人、忍激上人、

光明善導大師など皆な無妻者

です。無妻者だつて兄弟があ

り血族がある以上、後裔や末孫

もある譯で、ちつとも不思議で

はありません。

## 念佛の申し方

(問) ナムアミダブとナマンド

とは同じ南無阿彌陀佛ですのに

どうしてなまるやうになつたの

でせう。法然上人も正しくとな

へよと云はれたさうですが、ナ

マンドは本願に、なふでせう

か。眞宗の方に聞くと二宮新

左衛門を二新とよんでも返事を

するやうにどちらもおなじだと

云ひます。しかし私は信ぜられ

ません。お教へ下さい。また「ブ」

と云つても「ブツ」と云つても同

じでせうか、本願にかなひます

か。(川口生)

(答) 形式はさう重大な問題

ではありません。要は其聲の

中に信の内容が込められて居る

か何うにかあります。本願に契

ふか否かと云ふことも、聲の形

式に就ては別に規定されては居

りません。信仰があるか無いか  
で決せらるべき問題です。

然し徳本上人に依ると「六字

分明にせよ。六字分明でない

と片輪の佛體のやうになる」と

やかましく云つて居ます。御參

考にはなることでせう。

また「ブ」と「ブツ」との間

題も、委しく云ふ時は「ブツダ」

とか「ブツドハ」とか云ふので

すし「ナムー」をつけた時は更に

「ヤー」をつけるのが、梵語の

規定なさうですから、嚴密に云

へば「ブー」も「ブツ」も片言で

す。然し古來からの習慣で「ナ

ムアミダブ」とか「ブツ」とか

云つて居るので、其習慣と及び

言葉の使用で續けて云ふ場合に

便宜上「ブツ」とは云ひませ

ん。然し一聲丈とか、或は一番

最後のものは「ブツ」と云つて

よろしいし、十念などでは第九

聲目に「ブツ」と云ひ第十聲目

# 信 仰 相 談

は「ブ」又は「ブツ」と云ひますやうです。全部「ブ」だけでも差支へないでせう。こんな形式上の事で本願に契ふか何うかと云ふ心配はむしろいらぬ心配です。それよりも本願に契ふ心になつて居るか何うかを反省することが大切です。「ナマンガ」が何う云ふ次第でなまるやうになつたのかは存じません。空也念佛などは「ナモウダ」と云つて居ます。

## お通夜のお料理

(問) 葬式の時のお通夜等にお料理(精進料理にあらず)やお酒を出す事は死したる方に何か爲になるのでせうか。死したる時まで飲酒する必要はないと思ひますが。

事ではせうが、成る丈詳細に御知らせ下さい。(満洲 川原)  
(答) お通夜に食物や酒を出すのは、餘りよい習慣ではありませんね。家族の者は泣き悲しんで居るのに、近所の人は酒に酔つて陽氣になつて居るなんて、實に淺間しくて見て居られませんね。然し之も土地の習慣で止むを得ずと云ふところでせうが、近來かうした悪習慣は追々へつて行くやうです。  
また精進と云ふ事は「しらげすゝむ」と書いてあるやうに、ジツクリ落ちついて擔まじ屈せず努力を續けて行く事です。精進落ちなど云ふ事は、凡そ意味をなさない譯です。  
一體お精進と云つて魚肉などを使はないのは、喰べたものも我慢することから來たもので、もう一つの意味

は、生物の命を尊重すること、更には死人の肉を聯想することの嫌さから來たものかと存じます。  
ことに佛教は覺醒を尊んで「飲酒戒」と云ふ規定もあるやうに酔ばらひを嫌ふのですから、佛事には出来るならお酒も禁じたいものです。  
但し近所へのお體裁とか、儀

禮とか云ふので、全廢が困難でしたら漸次之を説いて町内の申合せにして行くやうにしたら如何ですか。町内の人も大部分は乾度賛成しませう。

## 味の悦境



ヨード素 天然性機有

## ヨードの素は

天然に多量のヨードを含み有害なノリ分がなく湯水に良く溶けます

## 用ひ度い方

肥り過ぎ、高血壓、お産前後の奥様方、顔色の良くない方、風を引き易いお方

## 進サンプル

發賣元東京本郷二丁目

大日本水産工業株式會社



## 卓效藥 ブレイン

血液を清淨にし骨格と神經を強化する強力ヨード有機性劑  
効能 動脈硬化、中風、腺病、授乳婦の憐力カルシウム不足

## 天台聖蹟参拜の記

野口周善

(前承) 翌朝は愈々、東西二十邦里、南北二十五邦里、周圍七十餘邦里の大山嶺、千山萬岳の中に點在する靈跡を巡拜すべく出發するの。ある。縣城の各所から徴發した二十四臺の橋(一臺に人夫三名乃至四名を配し合計七十五名)に乗つた一行と、兵士七名と巡警二名とは、徒歩にも前後を護衛し、蜿蜒々長蛇の如く數丁に亘る行列は、實に壯觀であつた。

この寺は智者大師の眞廟であつて眞身寶塔、外に五、六、七、八、祖の塔がある。隋唐時代の修禪道場の碑や、日本人の奉納した經卷や、天台二十祖までの木像がある。附近を總稱して佛壇と云つてゐるが、智者大師の説法臺や、修禪寺、大平寺などの舊蹟が残つてゐる。更に進み龍王堂を過ぎ、避暑地として種々新設備のある所を見て、更に北進し、石梁橋の瀧に臨んだ中方廣寺に至りて、中食を取り休憩後、名瀑を觀賞し、大菩提樹を見物し、上下方廣寺を轡上から拜して、又前進を續け華頂寺に向ふ、座環を遠くはなれて、仙境を行く吾等の姿

は、又自ら畫中の人である。溪間には新緑の中に藤の紅く美しきを見、山上には塔影の天を摩するを眺めつゝ、進み、日没の頃絶峯に近き華頂寺に入る。地は既に高さ四千尺、雲霧しきりに去來して、測候所を樹間に隠見し、新築中の伽藍を一巡して、接賓室に落付く、夕食の精進料理は天台山中第一の美味であつた。此所も亦百十餘名の一行を容れて知らぬ顔である。今夜護衛の兵士より、此所は最も危險の地なれば終夜不寐にて護衛するの申出ありたれど、吾等は聖蹟にて死すとも苦しからずとて辭す。

此寺は嘗て烏有に歸したが、目下大伽藍の再建に懸命の努力中である。寺僧七八十人、二十八日晚天華頂峯に昇る。雲霧深く小雨さへありて、日の出の壯觀には接せざりしも、開山大師降魔塔、拜經臺を拜す、脚下雲海の中に出没する諸山の頂は、八葉の蓮の如く自分は其の花心の中臺に立つの思ひありて華頂峯の名其の實に背かざるを知る。天下第一と云ふ展望は、雲霧に障りされて恠いまいし得たりしも、臺山第一峯の頂點を極めた喜びは無限であつた。詩聖李太白の讀書堂、多數草庵中の代表的な、藥師庵を參觀して、華頂寺に歸り、朝食の粥をすゝつて出發す、再び龍王堂、眞覺寺を経て、高明寺に至る、此寺は智者大師、圓覺大師と因縁深く、遺物多數を藏す、梵文の貝葉經、十六羅漢、韋駄天の木像などを拜し、中食を取る、午後は大雷雨に見舞はれ、螺溪の溪谷美を探り得ず、靈峯と史蹟を后にして夕刻再び國清寺に入る。

## 歌壇

與謝野晶子

○ 滋賀縣 垂井洋

若き日の夢幻と云ふ勿れほの  
くとしてわが道光る評 月光の白き清さに通ひた  
る若人の理想を云ひ得て最  
も佳。

○ 福島縣 朝日 蝶子

海邊き我等の里も荒川と須川の  
巻けば島に似るかな評 調子の高く優しくて然も  
新味ありて宜し。

○ 廣島縣 川田 信嶺

颯風が吹き残したる月白く國分  
寺村水底に似る

評 初秋の月夜のさま面白し

○ 久留米 中村 ツナ

念すてふよろこび知りて昨日け  
ふ哀しみに生き寂しさに生く

○ 廣島縣 田中 瑞穂

一切の衆生のために念じます佛  
なつかし父のごとくに

○ 京都 郁芳 隨潤

五月雨に湖のごと水満ちし吾  
が田に少女出でて苗とる

○ 宮崎縣 山本 清行

半夏生過ぎて雨なほ續くなり日  
向の川に水溢れつゝ

○ 奈良縣 落合 行義

正しきを行かんとすれどわが歩  
み速かならずもどかしきかな

○ 山梨縣 伊藤 久次

鳥小舎の屋根へ布團を干す上に  
李の花の白く散りしく

○ 小倉市 益田 慧光

み佛に花たてまつり香たけば今  
朝の心のどかになりぬ

○ 滋賀縣 佐々木孝純

ゆふ立の雨脚はやくすぎ去りて  
沙にしづくす松原の松

○ 大阪府 小山 文二

わが好み枯淡の域に入るごとし  
喜ぶべきか寂しむべきか

○ 北海道 花田 順往

贈られし木魚の音に聲そへて心  
うれしく念佛しにけり

○ 徳島縣 神原 梅

祈りなば眞如の月のさし出でて  
暗きに沈む心照さん

○ 鹿児島 兒玉 扶美

み佛に捧げん花は惜しからずい  
くつの庭木折りて手向くる

○ 岩田 諸眞

なつ衣うすきを着けて恥づるか  
なわが學問もこれに似たれば

○ 滋賀縣 福因寺 進

朝咲くしのめ草のやさしさを  
具へたまへる清き少女子

○ 東京 三野輪江雪

人の身の無力に泣きて仰ぐとき  
大空たかく山は澄むなり

○ 岩手縣 三木 邦美

さわやかに朝日の昇り山寺の鐘  
ひびくなり経聲もまた

○ 滋賀縣 本間 秀道

失ひし子思ふ母の悲しみに似る  
悲しさをもちてわれ経る

○ 別府市 川崎 孝道

兄弟子の心を今ぞわれの知る淨  
土に寄せしその歌を見て

○ 三重縣 大野 歩行

紫陽花に雨降り注ぐ里道を高く  
笑ひて村人の行く

## 投稿規定

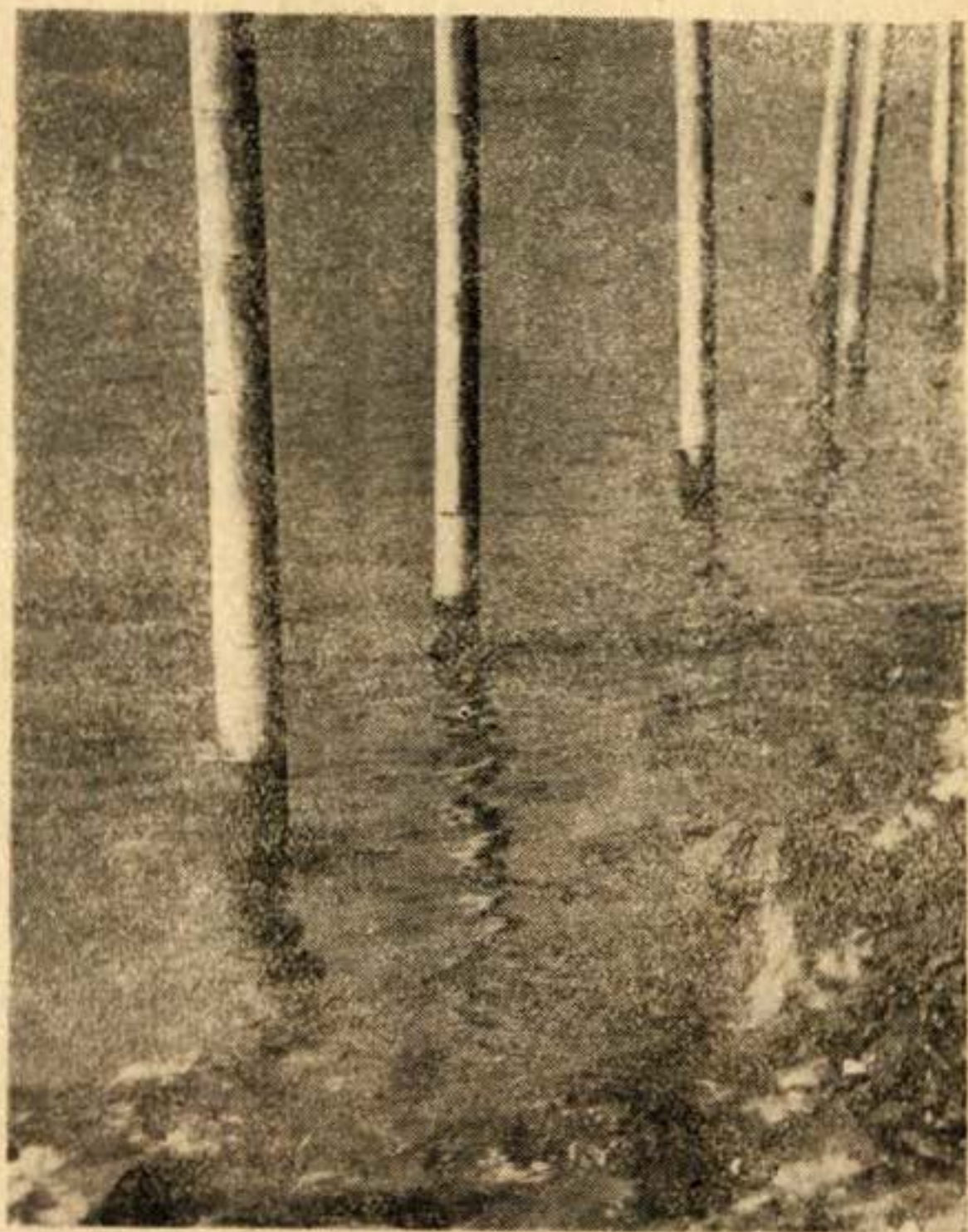
一、用紙は官製ハガキ、一回

一人三首以内のこと

一、文字は楷書で明瞭に、「應

募短歌」係宛お送り下さ

い



「日本は子供の樂園である。」  
とは諸外國の人々が我が國の母と子の間柄を羨んで言つた言葉です。まことに日本ほど母親が家庭的で子煩悩である國は少ないのです。我國の母親たちが常にその子を自分の側にをいて育ててゐることは洵に喜ばしいことです。

然しこの幸福な赤ちゃんも唯無闇に可愛がつてゐたのではかへつて不幸な結果を來すことがありますから、注意しなければなりません。  
左に簡単に赤ちゃんに關する注意すべき事項を記して置きます。

# かていのぺいち 赤ちやんの 扱ひ方

愛國婦人會  
隣保館長 田中法善

## 玩具の選び方

水につけても、拭つたりしても色の褪ぬもので、水に持つても餘り重くなく且つこわれ易くないものがよく、大きさも子供の口に入らぬ位ひのものがよいのです。ブリキ、硝子、眞鍮、鉛などのものや、端の尖

つたもの、けばくし、彩色したものはよくありません。ゴム人形、木製のおしやぶり、セルロイドのからく、ゴム製の動物などは比較的安いです。只セルロイド製は火がつき易いから火の側では餘り弄ばせぬ様にするのが大切です。

## 風呂の入れ方

温度は攝氏四十度位で、十分以内を適當とします。先づ手足を堅くさへてやる様にし、耳は水のはいらぬ様に、後から拇指と中指とでふさいで手掌で頭を持つやうにします。腋の下、あごの下、股の折れかがみの所は、よく念を入れて洗ひます。生後四ヶ月位は頭がぐらくしてゐますから注意を要します。顔は別の湯でガーゼまたは脱脂綿で力を入れず洗ひ、済んだら大きなタオルで體をくるみ、よく水氣をとり、要所々に亜鉛華澱粉をつけて手早く着物を着せるのであります。赤ちやんに使ふ人

浴具は、大人のものと區別して別に一まとめにして置きます。

## 抱き方 背負ひ方

三四ヶ月頃までは、まだ頭がしつかりしないから前腕を枕にするやうにして抱き、その後は眞つ直ぐに抱きます。抱くにしても右と左を交代にして、背骨が曲らぬやうに注意します。又背負ふには、細い紐などで強くしめて、赤ちやんの胸部を壓迫せぬ様にし、また脚部の運動が自由であるやうに背負ひます。

## 便の見分け方

黄色で、軟膏のやうなのが、健康の時の便で、牛乳児の場合は白味を帯びて團子のやうに固つてゐます。回数はまちまちですが大抵は一二回が普通であります。乳の飲み過ぎ、または何かの原因で腸を悪くすると緑色便、ぶつぶつのある便が出て

回数を増し、いやな臭氣のある時には早速注意しなければなりません。

## 泣き聲の聞き分け方

イ、眼を開いて涙を出さずに泣くのは空腹  
ロ、兩足を縮めて火のつくやうに泣くのは身體のどこかに痛みがある時  
ハ、頭をふり手をふん張つて泣くのは思ふやうにならぬ時か、おむつの汚れてゐる時  
ニ、弱い聲でうめくやうに長時間泣くのは衰弱した時  
ホ、氣むづかしく哀れつばい聲で眠らず泣くのは病氣の前兆ですから注意のこと

その他の注意

イ、勝手に食物を與へぬこと  
ロ、負つたまゝ馳け走りしないこと  
ハ、ヒキツケが來た時は、直ぐ様醫師に見せるやうにすること

新法  
釋語  
あふひ草

# 絶望のちの來るもの

中村 辨 康

けれどもかう云ふお言葉もあります。

妄念餘念をも願ず、散亂不淨をも云はず、唯だ口に名號を唱へよ。もし能く稱名すれば、佛名の徳として、妄念自から止み、散亂自から靜まり、三業自から調ひて、願心自から發るなり。然れば願生の心の少なきにも南無阿彌陀佛、散亂の増す時も南無阿彌陀佛、妄念の起る時も南無阿彌陀佛、乃至、三心現起するにも南無阿彌陀佛、三心成就するにも南無阿彌陀佛、これ即ち決定往生の方便なり。心腑に納めて忘るることなかれ（同抄一四）

これは實に深い深い體驗に依らなければ、云へないことです。心が散亂して居ては統一され得ないものと云ふ皮相なそして淺薄な謬りを破つたお言葉です。

と云ふのは、私達の心は散亂して居る中にも、必ず一つの統一を持續して居ます。それは「我」とか「自分」とか云ふ氣持のことです。「散亂の中の統一」、變な言葉ですが、之は誰でも經驗しつゝある事實です。して見れば、私達は散亂して居ても、自分の中心となつて居るものには「統一」とされ得る可能性はある譯です。

即ち、私達に信仰が出來た時、私達の心は散亂の中にも、南無阿彌陀佛に統一されない筈はありません。例へば私達の心に「戀」が芽はえた時、戀の對象たる異性の姿なり面影なりが、常に眼の前に往復して、心がそれに統一されて居るやうな具合に。だから何んなに心が散亂して居たつて、信仰に依る統一さへ出來ればよいではありませんか。

況して信仰の統一は單なる淺薄な一時限りの精神統一でなく、永遠に貫いて行くと此の人格的統一であることその事に、非常な重要性がある譯で、若し單なる催眠の狀態に似て居るやうな精神統一なら、信仰的には絶對價值あるものと云ふことは出來

ません。だから

近來の行人、觀法をなす事なかれ。佛像を觀すとも運慶、康慶が造りたる佛程だにも觀じ現はすべからず（同抄一一五）

と法然上人も誠しめられて居るのです。要は

「三心現起、三心成就す」

念佛になることが大切なのです。本心から阿彌陀佛に南無し得る念佛なら、恰度戀か萌え出したやうに、段々身も魂も打込めるやうになるものです。お歌の

阿彌陀佛に染むる心の色に出てば秋の梢のたぐひならまし

かりそめの色のゆかりの戀にだに逢ふには身をも惜しみやはする

（同抄二六〇）

とあるやうに「三心成就」即ち信仰が確立すれば、おのづから「三業調ひて」阿彌陀佛の中に統一されて来るものです。

しかし、唱へさへすれば、それでよいわと散心の中に腰をおろ

して仕舞つては、何時までたつても本ものにはなりません。それ

は念佛を以て一つの陀羅尼風のものにして居るからです。即ち名

號は「萬德所歸」であるから、一切の功德が籠められてあつて、

稱へさへすれば眼には見えないけれども、利益がチャンと貯蓄さ

れて行くのだと考へる類で、眞言の陀羅尼や呪文などと同じやう

なものに見て居る極めて淺薄な念佛です。こんな信仰は無論私達

の納得されるものではありません。

凡そ念佛と申しましても、信仰の深淺に依て、色々あるやうに思はれます。法然上人の御弟子の中にも、色々な異説を立てたものがあつて、それを楯に取つて、比叡山や奈良の舊佛教から「法然排撃」が出ましたが、非常に高遠な理論を以て自分の説を立證せんとするものもあり、或は甚だしいのになると、エロ的な迷信鼓吹に墮してしまつたものさへありまし



決定往生道

人は普通に云ふ念佛を、大きく二種に分けられて居ります。即ち凡そ念佛に他力の念佛あり、自力の念佛あり。他力の念佛は往生すべし。自力の念佛は本より往生の志にて申す念佛にあらざれば、またく往生すべからず（同抄一一七）

念佛の数を多く申すものを、自力をはげむと云ふ事、これ又ものも覺えず淺間しきひが事なり。ただ一念二念を唱ふとも、自力の心ならん人は、自力の念佛とすべし。千遍萬遍をとなふとも、百日千日よるひるはけみつとむとも、ひとへに願力を頼み、他力を仰ぎたらん人の念佛は、豈々念々しかし乍ら、他力の念佛にてあるべし。されば三心を起したる人の念佛は、日々夜々時々刻々になふれども、しかしながら願力をあふぎ、他力をたのみたる心にて唱へ居たれば、かけてもふれても、自力の念佛とは云ふべからず（同抄一四七）

と云つて居られますが、求信時代の念佛は、誰でも自力的な念佛で他力的でないのは、事實止むを得ない事です。つまりまだ信仰になつて居ないからです。

どんな人だつて、今まで自我中心の生活をして居たのですから自分を頼む氣持のないものはありません。若い時は、無論元氣一杯で積極的に自分をよくしようとする自我の氣持が旺盛ですし、年を取つて人間生活の経験を深く営めて來たものは、他は頼りにならぬ、結局自分のことは自分で努力するより外にないと、あきる程さとりされて來て居ますから、どつち道、一般に自我が強く

なつて居るものです。

だから、どうしたつて初めの間は自力的な念佛であることは止むを得ない順序であります。

然し、自力的と申しましても一分、他力的な意味も含まれて居るのが念佛です。少くとも南無阿彌陀佛の中には「頼む」心が含まれて居ます。否や言葉其ものは全然他力的な言葉です。全然他力的な言葉である「南無阿彌陀佛」を自力的な氣持で稱へて居るところに矛盾があるから、心と言葉とがチグハグになつて居ます。だから落着がないのです。之が求信時代の念佛内容ですから、何うしても信仰が確認されないのでもあり、念佛して居てもすぐあきて來る譯でもあります。

人間は何と云つたつて何か強い精神衝動を受けて心が大轉回しない限り、通常ではこの自我中心の心は折れるものではありません。

然るに念佛して居ると、漸次に他力的な氣持が誘導されて來ます。之は決して不思議ではありません。念佛それ自體が他力的な言葉であるからです。また此の他力的な言葉を繰返して居るところに、おのづから自己反省が起つて來ます。此の自己反省が起るたびに一分づつ、他力的な轉回が行はれます。之を「信機信法」と善導大師は云つて居られます。

そして此の状態を少し宛繰返して漸次に深く信仰へ導かれて行

くのを「漸機」と云ひ、大轉回して急激に強くするどく、ハツキリ人格轉換を體驗するものを「頓機」と申しますが、自分が漸機であるか、頓機であるかは、無論判るものではありませんから、私達としては一心に念佛するより外に手段はありません。

茲で一寸御注意までに申し上げて置きたい事は、大概の求信者が漸機よりも頓機的な急激な大轉回を貴む傾向のあることですが、之は非常に弊害のあることで、他からも尊敬せられ自分も大きな宗教經驗に依つて、ハツキリ轉換した事を知つて居るから、ともすれば、聖者的な氣持になつて、何となく「自分は特別な宗教的天才だ」と思ひ込むやうになつて、ウィリアム・ゼームスの謂ゆる「小聖者」になり勝になる事であります。無論、大きな法悦に浸つて、一寸常人と違つた氣持になつて居ますので、それは無理のない事かも知れませんが、或る一定の時期が過ぎますれば、高調したその精神状態も漸く鎮靜して常

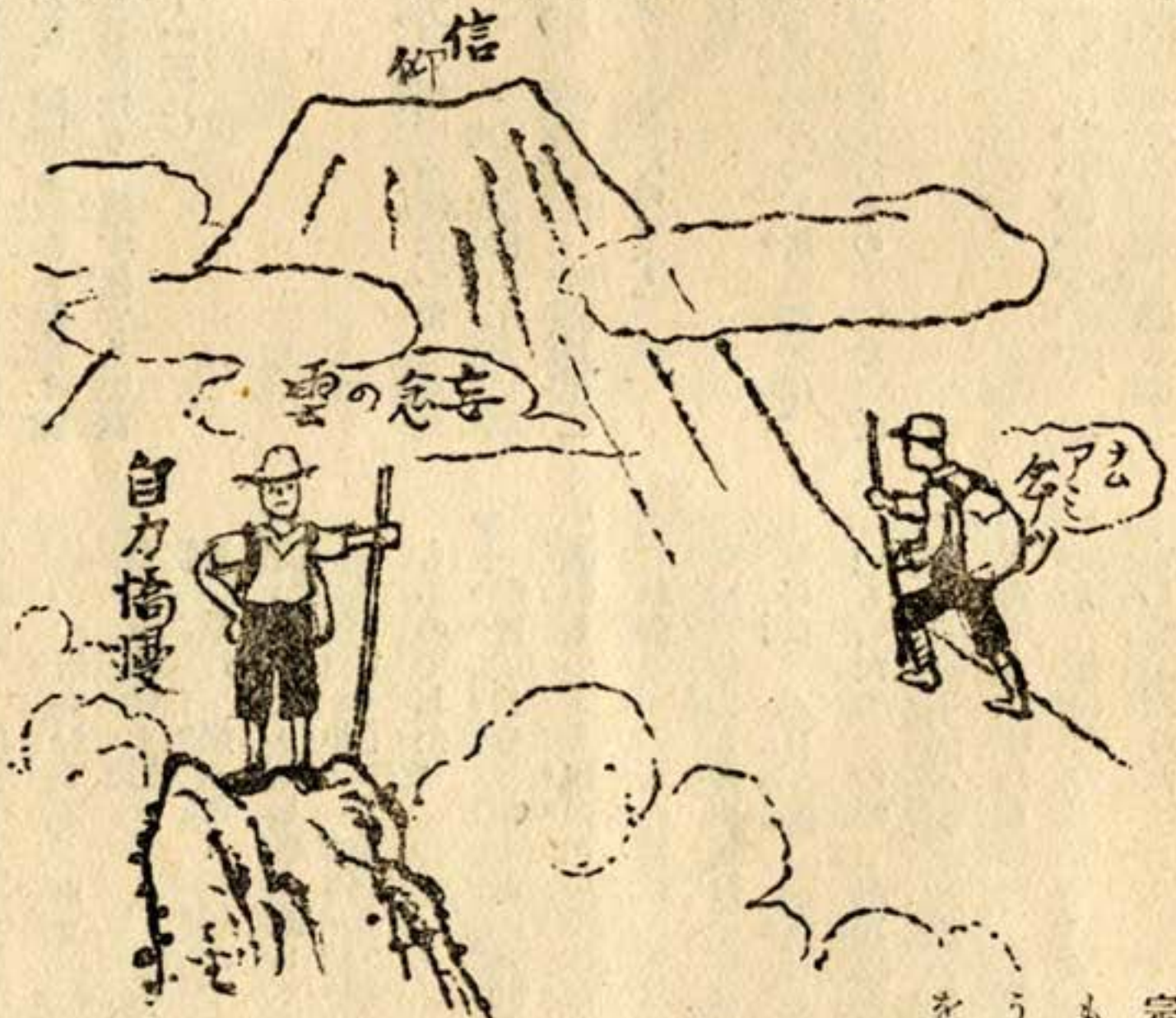
態に復しますから、其處に到れば漸機も頓機も同一であつて、別段なこともないのですが、その非常的な經驗に幻惑されてツイ非宗教的な「慢心」が芽ばえて來ないに

も限りません。さうなると、其人はもう鼻もちがならぬやうになります。之を法然上人は

信

念の忘る

自力倚



げにげにしく念佛を行じて、げにげにしき人なりぬれば、よろづの人を見るに、みな我が心にはおとりたり、あさましく悪ければ、我が身によきままには、ゆゆしき念佛者にてあるものかな、たれたれにも過ぐれたりと思ふなり。この事をよくよく意得てつつしむべきなり。

世もひろし、人も多ければ、山の奥、林の中に籠り居て、人にも知られぬ念佛者の、貴くめてたき、さすがに多くあるを、我が聞かず知らぬにてこそあれ。されば我身のいみじくて、罪をも滅し、極樂へもまいらはこそあらめ、ひとへに阿彌陀佛の願力にてこそ、煩惱をも罪業をもほろぼし失ひて、かたじけなく彌陀ほとけの、てづからみづから迎

へ取りて、極樂へかへらせましますことなれ。

さればこそ我力にて往生する事ならばこそ、我れ賢しと云ふ安心をばおこさめ、若し惛慢の心だにも起りなば、たちどころに阿彌陀ほとけの願にはそむきぬるものなれば、彌陀も諸佛も護念し給はずなりぬれば、惡覺のためにも惛さるるなり。返す返すも惛慢の心をおこすべからず（同抄一三七—一三九）

といましめられて居ます。

私にもかうした経験はあります。

私はどちらかと云ふと謂ゆる頓機の方に屬する組だつたと見えて信州の山から歸ると、萬事を抛擲して、一心に念佛の工夫に取りかゝつたのでした。其間は恰度十ヶ月、毎日朝夕一時間乃至二時間位づゝ二回、人も交へず獨りで念佛して見たのです。

或日の事、念佛中に不圖思つたことは、

「念佛の用心工夫と云ふことも、結局自分のやつて居ることは、

自力的なもので、他力を仰ぐ念佛とは似て非なるものではないだらうか」

と云ふ事でした。

「さうだ。自力的な氣持にならぬ事、謂ゆるすけさいぬ念佛、素直な氣持での呼びかけ。その氣持を持続する事が工夫と云ふことも知れない。少くとも自力的な氣持がある限り、自分に信仰は訪づれて来る譯がない」

かう氣が付いたものですから、今まで三百日間いろ／＼工夫して居た事を、全て捨て去つて本當にむき立ての卵のやうな無垢な氣持になつた氣持で念佛したのですが、何時しか妄念の中に入り込んで居るのです。ホツと氣がついてまた素直な氣持を取りかへしつゝ續けて居ますと、また何時の間にか飛んでもない事を深く思ひ續けて居ることに氣が付きまします。之ではならぬと、幾度か幾度か心を取り返し取り返しては念佛するのですが、如何に氣張つても何時の間にか念佛から抜け出てくだらぬ餘念の中に入つてもふのでした。

「嗚呼、自分は何と云ふ淺ましい者だらう。自分で自分の心の統御がちつとも出来ないではないか。自力になりたがる心を押へて、これ程までに苦心慘澹して居るのに、何うしても自我が擡頭して來て、他力を仰ぐ氣持にはなれない。少くとも、あの時から恰度三百日、今日迄練りに練つて來たけれども、それは畫餅に過ぎないものだつたのだ。結局私と云ふ人間は自力的修行に進むべきもので、他力的信仰には縁の遠いものなのかも知れない。と云つて折角やりかけたものを、今更捨てるのも惜しい。よしッ。もう一度捨て身になつてやつて見よう。今度駄目だつたらスツカリやめてしまふだけだ」

さう思つたものですから、殆んど眞剣な氣持で坐り直し、一心に念佛に取りかゝつたのです。然し初めの内はよかつたのですが、

またまた我れ知らず餘念の中にスツカリ入り込んで居る自分を發見いたしました。

フツとそれに氣の付いた瞬間でした。私は何うした譯か深い深い穴の中に、ドンと突き落されたやうな氣持になりました。「噫。私は何うしても救はれないのだ。よしかうなつたら、もう破



れかぶ  
れた。  
善に強  
いもの  
は惡に  
も強く  
なれる  
筈だ。  
もう俺  
は信仰  
なんぞ  
はいら  
ない。  
誰が要  
るもの  
か。俺

は惡魔になるのだ。サンザ悪いことをして、世の中に出來る丈、害毒を流してやるのだ。何に羨ッ。善人なぞになつてやるものか。結局死んだらいいぢやないか。より假りに惡の報ひに依て地獄に行つたつてかもふものではない。自分の受く可き苦から逃げやうなんて云ふやうな卑怯な人間ではないのだ。信仰が何だ。念佛が何だ。蕘の役にも立たないではないか。たつた一人の俺をさへ救ふ事が出來ないではないか。馬鹿馬鹿しい。こんなに一生懸命になつたら、天下何事も出來ない事はない筈だ。然るに信仰はどうだ。念佛は何うだ。何の益も無かつたではないか。もう念佛も蕘もあつたものではない。俺は信仰なんて云ふ胡麻かしな一つの人形態にだまされて今日まで引きづられて居たのがくやしい。念佛なんて云ふこんな馬鹿馬鹿しいものがあるものか」

かう思ふと珠數も木魚もおつぼり出して、其暗い穴の中に、くやし涙に打ち暮れて居たのでした。そして念佛に對する反抗的な氣持で惡魔になり切らうと身をもだへても居たのでした。

けれども一面に於ては非常にそれが悲しかつたのです。少くとも信仰を求め初めてから三年は經つて居ます。三年と云ふ年月は決して私に取つて短い時間ではなかつたのです。私としては精一杯に努力して來たつもりです。今からして火の玉のやうな突きつめた氣持になつて居るのも、私としては弓折れ矢盡きたからなのです。少くとも今までの苦心が一朝にして水泡に歸するかと思ふ

と、なさけなくてたまりませんでした。

暫くすると、ふと心に浮んで來たのは

「佛心者大慈悲是也」

と云ふ言葉でした。

「さうだ。若し阿彌陀佛が大慈悲であり、其大慈悲心の具體的表現として四十八箇條の本願があり、其本願力が如何なる惡人をも救ふと云つて一つの立派な教義になつて居るが、若しそれが本當ならば、いま墮落の底に沈まうとして居る絶對絶命の私の上に、その救ひが現はれなくてはならぬ筈である。今一人の人間が善惡の岐路に立つて居るのだ。救ふべきならば今が絶好の機會ではないか。此の最後の斷末魔に居る私の上に大慈悲が現はれて來なくてはならぬ。今をばづして外に現るべき時はない筈だ。然るにそれが氣振り程にも現はれて來ないのは如何した譯だ。現はれる。大慈悲。現はれよ。如來の救ひ」

私は殆んど氣狂ひのやうになつて叫ばうとしたのでした。然しまたフト氣が付きしました。

「イヤ。之に氣付いた事が如來の大慈悲ではないだらうか。少くとも絶望の中に惡魔的更生をしやうと決心した此の最中に、如來の大慈悲を想ひ起したことその事が、既に私の上に救ひが現はれた事ではないだらうか。如來の大慈悲とは我儘な得手勝手な救ひの要求のところに現はれるものではなくて、人々をして正義に立

脚せしめ、小さき自我を殺し、大なる如來心の中に更生せしめんとする事ではないだらうか」

急轉直下と云ひませうか、私の心は此時大旋回し初めたのでした。

すると今迄、暗い大深淵に沈溺して居た私の身體が、スーッと上に浮びあがる様な感じがして、ホッと吐息すると共に、再び木魚を取つて念佛して見る氣になつたのでした。

「救はれたのだ。救はれたのだ」

少なくとも私は如來の大慈悲に觸れたやうな感じがして居ます。

「見えざる力」

さうです。その見えない力が、グングン私の上に意識されて來ました。さうすると何時の間にか、私の念佛は一つ一つ其見えざる力に吸ひ取られつゝある事に氣が付きしました。

念佛の一念一念が悉く見えざる如來に向つて居ます。しかも

一つ一つ確かな手ごたへがあるではありませんか。法然上人の謂ゆる「既に得たる心地の念佛」と云ふのは、何んか精神内容かは知りませんが、私は私相應に「得たる心地」で念佛して居るのでした。

長い苦心は報ひられて信仰は成就したのです。

「さうだ。私は信仰を得たのだ」

さうハツキリ意識して來ました。すると、何と云ふことなしに涙がこぼれて來るのです。止め度もなく滾々として盡きない泉の如く泣けて泣けて來るのです。

信後に起る歡喜の涙とでも申すのでせう。それからと云ふものは毎日毎日泣けてたまらぬのです。念佛しては泣き、泣いては念佛するのです。然しこれも段々日數と共におち付いて來ました。事は至極簡單なのですが、相當苦心しただけに喜びは大きかつたのです。

あなた方から御覽になつたら幼稚な者、單純なものに見えるかも知れませんが、此極めて單純な一經驗が私を一變させて仕舞つて、私の生活態度はそれからスツカリ生れ更つたやうになつて來ました。

### 「自己改造」

さうです。自己改造することが、之からの私の生活でなくてはならぬと氣がついて來たのでした。

本當に生れ更つたやうな氣持です。

「改心」さうです。私は改心を決心したのでした。

念佛も相變らず雜念妄念が起りますが、ちつとも邪魔にはなりません。南無の一念だけは、スツスツと向ふへ通つて行くのです。心が二重に働くとでも申すのでせうか、我乍ら不思議の喜びです。さあ、それからと云ふものは念佛マニア見たやうになつて、誰

をつかまへても、不遠慮に念佛をすゝめるのでした。

そして汽車などに乗つても、道を歩いてても、何の人も此の人も皆んか無信仰者に見えて、腰から下がフラフラして居るとしか思へませんでした。自分だけが「げにげにしき人」になつた氣持です。驕慢です。恐ろしい事です。

人間の行く手、何處にもかうした惡魔は潜んで居るものですが、御當人、それにはさつぱり氣がつかまませんのです。そして我欲に終始して居る人を見ると

「憐れなる無信仰者よ」

と、矢鱈に氣の毒かつたものです。

然し、之も一味噲の味噲臭きは上味噲にあらず」と云ふ言葉の通り、まだ不徹底な信仰に過ぎなかつたのでした。

それでも御蔭で念佛だけは病着きになつてしまひ、毎月一回は必ず何處かへ行つては一週間位の念佛をしたのでした。

そして「自己改造」に心の眼を向け初めました。そして自分を反省することを中心とするやうになりました。(つゞく)

いけばらば念佛の功つもあり、しなば淨土へまいりなん。とてもかくても此の身には思ひわづらふ事ぞなきと思ひぬれば、死生共にわづらひなし。

— 法然上人法語一九四 —

# 鑽仰運動 ニュース

日を追つて躍進する

## 各支部の組織活動

僅か一年數ヶ月の間に、一萬五千の會員を獲得して、事業の一つである「浄土」の發行部數は二萬五千を算し、全國に散在する支部の數は四百五十の多きに達した。各地から湧き上つた「會」を支持せよの熱意は、五百の維持會員となつて、會の經濟的前途に燦然とした光明を投げてゐる。何年ぶりとかいふ今年の夏の酷暑も物かは、各地支部の活躍は物はい。中村理事は會の重要職務を帯びて遠く北海道方面に出張中であるし、別項の如く直江津の佛教大學講座も盛況裡に終了した。

日と共に各支部の活躍は熾烈になつて行く。

## 直江津支部の

## 夏季佛教大學講座

絶賛裡に終了す

既報の如く八月二日から五日まで本會直江津支部の夏季大學佛教講座が郡教育會と町教育會の後援で開講されて、東京からは陸軍教官・大正大學教授大村桂巖氏と本會の佐藤賢順氏とが京都からは佛教專門學校教授稻

宗教々育講座 大村桂巖教授  
信仰體得講座 稻垣眞我教授  
日本精神講座 佐藤賢順教授  
講義の相間には、大村教授は高田

秋立つてひぐらしの聲が郷愁に似た哀感を傳へてくるが、残暑はきびしい。讀者各位の御自愛を切意する。

## 蓮光寺の例会

東京本郷駒込達達菜町蓮光寺支部でも主任戸田氏の幹旋で、毎月例会を開く事になつた。本部からは毎月講師が交代出講する筈である。

## 會員の聲

▽：『浄土』八月號を本日拜見致しました。私は何物をもさておき一息に讀み終りました。編輯者諸賢の努力の功と隆盛におもむく鑽仰會に思はず手を握りしめました。前月に私が申し上げました『古い型』の清算は遺憾なく今月號にあらはれて居ると思ひます。喜びにたえません。

『山での宿命』は實に私の心を強くひきつけました。この文章では上人も佛も出て來ない。併しこの文章の奥底には胸をつく幾多の分子が包含されて居り、上人の念佛の精神も溢れて居ります。世間にかゝる記事を欲してゐるのです。立石氏の所謂『俗人にとりて古き教が新しき言葉に於て教へらるる』を欲して居るのです。

眞野先生の御記事は毎月二回づつ讀みます。先生の御記事は何時も強く胸を打ちます。『鬼界ヶ島』は趣味ものとして結構、「果心居

市郵便局に、稲垣教授は信越窒素肥料株式會社と直江津郵便局とに、佐藤教授には二本木の日本曹達株式會社工場にそれぞれ大衆講話を試みて、何れも多大の感銘を與へた。特に大村稲垣兩氏とも胃腸を悪くしてお粥を啜り乍らも、使命感からの奮闘には一種悲壯なものがあつた。

### 佐藤氏の熱辯

……直江津の夏季講座に於て



## 愈々動き出した

# 滿洲の長春寺

滿洲國の首府新京で法然の大旗を翻して教線の擴大に盡力してゐた長春寺（住職伊藤善信氏）では、今年の管長渡滿を紀念として、愈々本會の支部を結成する事になり會員募集の印刷物と見本「淨土」とを全市に散布して大々的の會員獲得運動に奔走中である。尙、結成後は毎月二十四日二十五日の兩日に例會を催し、法然上人の御教體得に進まんとして、阿部亮光氏が主任となり準備に没頭してゐるが、今後の活躍が期待せられてゐる。

## 鑽仰講演會

### 調法寺支部の催し

茨城縣稻敷郡本新島村西代の支部では主任松本宗道氏の努力

で、近日中に町の小學校講堂で講演會を開く事になった。佐藤賢順氏が出講して「現代の文化と淨土教の立場」を講ずる筈である。夜は松本氏の調法寺で座談會が開かれる事になつてゐる。

## 秋風のうた

——「山での宿命」をよみ、「奥秩父」の著者に寄す——

宮崎 稔

生きの命のゆくところ  
獨饑しるし秋の風

死ねば死にきり、丘に  
せめて蟋蟀のなくらむか

士」「手越の里の白拍子」「死亡通知」等も教へらるゝ所があります。今後益々現實に即して立派な『淨土』を發行し、祖德鑽仰に資せられん事を祈ります（三重縣・香住泰夫）

▽……「淨土」の大衆的編輯は結構だが、毎號一編位は佛教或は淨土宗の研究的文章を載せて欲しいと思ひます。例へば何月號だつたか、椎尾先生の力ある一編の如きものです。（福岡縣・田中英二）

▽……私の家は代々神道で、佛と云ふ事は言葉にも出さず、祝詞により父祖の靈をお祭り致してゐます。而るに一昨年昨年と二年父母續いて逝去し、唯々世間の事が悲しく思はれ始めました處、昨夏貴會の『淨土』を讀み、それから會員の末席に加はりました。お蔭様で今では『淨土』で段々悲しみも去り朗らかな生活にいきしんでゐます。尙益々精進生活へ進まんと思ひますが、名古屋市内の淨土宗の寺院を御紹介下さいますれば幸甚に存じます。（名古屋市・安藤忠樹）

## 編輯後記

◆矢張り秋は間違ひなくやつて来ました。我慢のならない暑さであつたが、こいつをしんぼうしぬ

けば、明朗な秋が僕のやうな貧乏人の上にもやつて来る。山にも海にも行けないのが残念だなアと思つてゐるのも一時の間で、涼風がたてばそんな妄念はけろりと忘れてしまふ。世の中はうまくしたものである。

◆本號の巻頭を宮城道雄氏の隨想を以つて飾ることを得ましたのはわれらの誇とするところです。氏は筆曲界の第一人者、新日本音楽の創始者であり、遠く海外にまでその名聲を轟かしてをります。その澄み渡つた心境のか

なづる隨筆のよさも亦既に定評のあるものです。此度特に本誌のために寄せられた一文、眞剣な氏の求道を素直に語られてわれらの胸を強く打ちます。

◆なほ、松岡譲氏も本誌のために隨筆をお寄せ下さいまして、編輯子の喜びは二重となつた譯であります。氏は文壇に於ける一方の雄、また餘技の庭球に於ても雄名を馳せてをられます。

◆特輯には曹洞宗管長鈴木天山師野上運外師の當代の二名僧に信仰の世界に就て語つて頂きました。兩師の尊い體驗が語るところ必ずや讀者を裨益するところ少なくないと思ひます。

◆小説、童話等にも、斯界の第一人者を以つてし、「淨土」の陣

容益々固しと云ふところであります。

◆眞野正順氏の講話は、今月は休載いたしました。が、十月號からは舊倍の元氣を以つて健筆を振るゝとのことです。から、御期待を願ひます。

◆本號から特に鑽仰運動ニユースを巻末に付けました。これで本會の運動の現状も大體わかり、同信、讀者の御意見、御希望も反映される譯です。振つて御投稿下さい。

◆「信仰相談」は毎號非常な好評を博しておりますが、また質問投書が非常に増加したので、載せられないのも澤山御座います。が、取捨は編輯部に一任願ひます。

淨土 九月號

昭和十年五月二十日  
第三種郵便物認可

昭和十二年八月三十日印刷納本  
昭和十二年九月一日發行

(定價金十錢)

編輯兼 眞野 正順  
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二ノ二  
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園四丁目四番  
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢

(送料一錢)

一ヶ年 金一圓

(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人鑽仰會の會費です。入會申込みと同時に一圓御納めになれば、「淨土」及び月刊新聞「法然鑽仰」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

# 法然上人法語抄

藤井 實應 編  
菊半裁版 一四四頁  
クロース装函入  
定價 卅四錢  
送料共

信仰の珠玉！ 浩翰なる上人遺文中より、現代生活に最も適切なるものを選んだ句々金玉の聖句！  
現代日本人の聖典！

再 版 出 來 !!

手頃なポケット型、装訂も確りしたものですから、仕事の合間、電車、自動車の中で手軽に取出して讀める。心靜かなる時、惱める時、隨時隨所に讀めて心の糧となり生活の指針となる。

敬虔な編者が一字一拜の誠を捧げ、嚴密な校訂を経てなつたもの。配列にも、編輯にも新機軸を開き、活字も九ポイント總ふり假名付であるから誰にも讀める！

勤め人も商人も労働者も、そのポケットに懷中に必ず一本を蓄へて信仰の眞髓に接して正しい生活の確立に資して下さい。

◇ 會 仰 鑽 人 上 然 法 所 行 發 ◇

新刊

中里介山著

# 法然上人傳

三六版二五〇頁  
九ポバラルビ付  
美麗クロース装  
定價 六十四錢  
送料共

法然上人を知ること、これは日本人として最大の常識である！

著者の言葉から

法然上人傳の權威は何んと云つても「勅修御傳」である。「勅修御傳」即ち「法然上人行狀繪圖」は伏見天皇、後伏見天皇、御二條天皇の三帝が法然の遺徳を深く敬信なされてゐたが、その時分は異教の手あひが争ひ起つて妄りに法然の傳記を作るに至つたので、正統の深くこれを憂ひ、天子にも御心を悩ませられた結果、後伏見上皇の勅により叡山功德院の舜昌法師が近代杜撰の著作を捨て、信用すべき實録をとつて收め、(中略)十四年を経てこの行を了へたものである。(中略)それ等を要譯してこの雅文の典籍を比較的安易に讀ましむることは現代人に對する一つの親切であると思ひて、敢てこれを爲して本書を作つた僭越の罪を許されたい。

古文豪の手になる  
古典の通俗化！

發賣所 法然上人鑽仰會

芝區芝公園十五號地  
振替東京八二一八七

◇ 社友の人隣 所行發 ◇

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)  
昭和十一年八月廿日印刷本 昭和十一年九月一日發行

淨土 第二卷 第九號 定價金十錢(送料一錢)